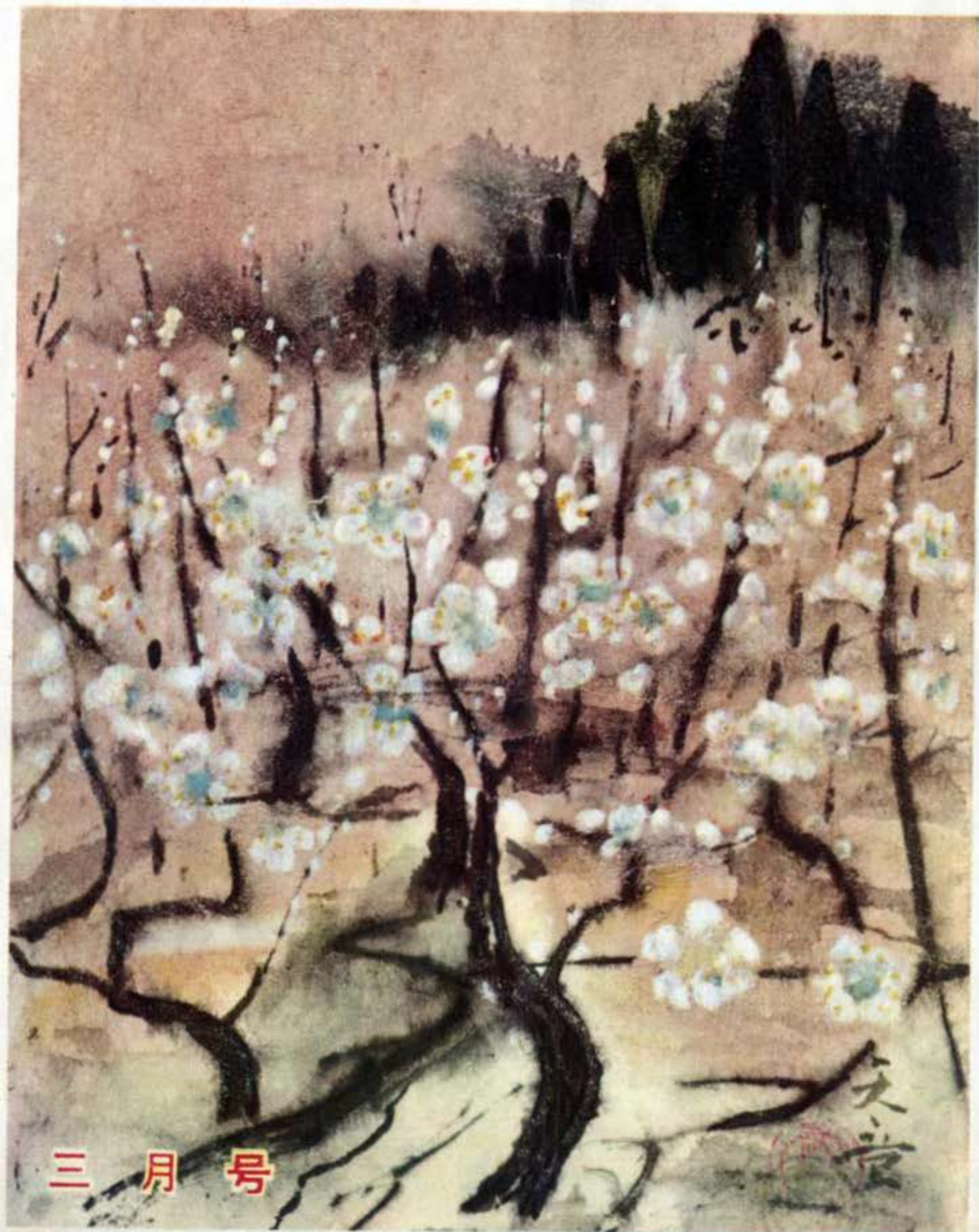


浄土

——法然上人七五〇年御忌特集号——



昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別扱承認雑誌第三五二号）
昭和三十六年二月二十五日 印刷 昭和三十六年三月一日 発行

第二十七卷

第三号

三月号

浄土——御忌特集号——目次

表紙 扉絵

結城天童

さし絵・カット

加藤金一

法然上人のおことば……………推尾弁匡…(2)

これからの念仏……………大野法道…(10)

法然上人に学ぶ……………藤井実応…(5)

念仏はよみがえる……………竹中信常…(12)

法然上人を偲んで(座談会)

武田泰淳……………佐藤密雄……………(16)

仁戸田六三郎……………司会 宮林昭彦

高僧伝 掘尾務貫……………大橋俊雄…(32)

法然上人の感化……………村上博了…(34)

中国綺談 迷執(下)……………牧尾良海…(36)

仏教音楽私考……………村田武雄…(28)

母三人の弁……………三橋美智也…(30)

扉の御法語……………(14)——意心仏心……………(31)

仏祖のことば(三)……………宮林昭彦…(26)



浄土

御忌特集号

あながちに信ぜざらん人は、仏なを
ちからおよび給うまじ。いかにいはん
や凡夫はちからおよぶまじき事也。か
かる不信の衆生のために、慈悲をおこ
し利益せんと思はんにつけても、とく
極楽へまいりて、さとりをひらきて、
生死にかへりて誹謗不信のものをもわ
たし、一切衆生をあまねく利益せんと
思べき事にて候也せ。

法然上人御法語



法然上人のおことば

椎 尾 弁 匡

(大本山増上寺法主)
(文学博士)

南無阿弥陀仏、往生の業には念仏を先とす

このおことばは、選択本願念仏集のはじめに、上人自から題号と、次の行に、南無阿弥陀仏として、「往生之業、念仏為先」と割書きになされ、第一章より安樂房が筆受したが、たまたま「能筆でなければこのお役にはなれなかった」と申したのを、お聞きなされた法然上人は「この僧僞慢にて罪や得つらん」とて、真観房に代らしめれたと伝えられる。すれば単なる御法語というよりは、お書きつけとも申すべきである。この伝説の通りになっておる選択集は京都廬山寺にあり、浄土宗として、最も尊きものであるから七百回御忌に当りて、知恩院の宝物に頂きたいと思ったが、運びかねたので、学友石塚竜学君の関係で、青森の有志が限定写真版にとることとなって、世にひろまることとなった。そのために、法然上人御直筆というお名号や、文書がいろいろあっても、これほど確実な御直

筆はないというので、選択本願の文字や、六字のお名号は大きく複写して、各所の額や軸などで拝見することが出来る。私もその写真出版の発起人として一部を保存していたが、昭和二十年五月縁日消失の際、永年書写した多くの重要記録とともに、消失した。その後、天岡氏来山、知恩院にて、山下老師より、この書を頂き帰ったと語られたので、前記のことを語ったところ、「結構なご本でも、私にはその尊さをあらわせませんから差し上げてもよい。」とのことで、「頂きましょう。」と申したら、数日後、御夫婦で持参された。その後、数年、伊藤家で奥さんに逢ったとき、あれ以来夫は病床につき、も早や余命すくなし、とのことで、早速訪問、奥様を通訳として法話、その日は歳末であったが、越年早々西往された。その後は、この一冊に新しき重要さを感じ、伝法の際、被見せしめて、共に法益をいただいておる。

さて、このことばについては、恵心僧都の「念仏為本」の語を例とし、ここにいう念仏は単に諸経諸仏に通じる念仏の一たる念仏ではなく、善導大師の伝えられる本願念仏の南無阿弥陀仏であり、更に上人が当時専らにせらるる、選択本願の念仏たる南無阿弥陀仏であるとか、観經九品の往生であるとか、下品において出る念仏であるが、大經の三輩いづれにも「一向専念無量寿仏」とあるから、三輩九品に通ずる念仏であり、九品には世戒行の三福や、大縁・小縁・悪縁の衆生が種々の行によりて往生する。即ち諸行往生するも称名すぐれたりとの意味とか、凡入報土の宗意を明らかにするものだとか、いろいろの解説もあり、六十五才にして、選択本願念仏集をお纏めになったとき、法然上人の全精神を決判なされたおことばであると思う。

七百回忌御忌のさい、私は法語集編纂の申入れに当り、「念仏を申し申し余事をなすべし、余事をしひしひ念仏すと思ふべからず」との御法語題を解説するよう求められた。私は特別な安心や別時供養やで、多辺の念仏をすすめられるところにも、それぞれたつとい経意を頂くも、ことに、長時平生の念仏は洗面にも掃除にも、食事にも、それぞれの職業・常務にも、静かに床につく時も、先づ念仏

してそのことに当れば日々夜々の生活が、ことごとく往生の業となり、その心にはいきどおりや、我儘や、我欲が混じっても、南無無阿弥陀仏を先として、その身、その心、その行が往生の業となる。

四修の中には恭敬を第一とする。その恭敬は仏壇を清めて、香華灯明を供うるときだけでなく、塵埃にまみれて荷運びをするにも、南無阿弥陀仏して行えばよき恭敬の態度であり、その荷物を整理するも、食事も、就眠も各々南無阿弥陀仏を先としてゆけば、雑行ではなく無余無間修の念仏であり、息と息とに切れ目があっても三業思儀いろいろちがうようでも、みな念仏を先とした真に生きゆく道であり、極楽往生の一本道であって、無間修、無余修が全うされる。従ってまた、一心専念弥陀名号の正定業である。本願によるすぐれたる正定業、南無阿弥陀仏であり、何人も決定往生の正定聚たる業であり、また南無阿弥陀仏によりて、本当にまとまれる業（正定業）であって、念仏為先のすぐれたるお示しである。四十三才頃から二十余年、念仏専修の業をつませられ、殊に南無阿弥陀仏を先とせる日々の御生活に、念仏往生の有難さを味わわせられた法然上人が、この体験と経意に基いて選択集のはじめに、選択の題目につづいて、この十四字を直書されたものであり、このお御直筆を拝して、強い光を感じるものであり、建久十年、正治伝道によりて、各地の念仏信者が、急増したのであり、のち十四年さまさまの御難儀もあったが、何人が、いつ、どこでも念仏するところに法然上人また還えりてそこにいますと仰せ残されたことまで、有難く頂くことができる。南無阿弥陀仏。





法然上人に学ぶ

——念仏と学問——

藤井実応

法然上人のみ教を仰ぐ念仏者にとっては、上人は念仏者の御手本である。何かにつけてもし法然上人今日ましまさば如何ようになされるであろうかと自らを省みては励まされるのである。日常のあらゆることの上に上人を憶い、上人をお慕いして学んでゆきたい、その中で特に念仏と学問について学びゆかねばならぬところを記してみたい。

法然上人のみ教を仰ぐものは、そのみ教を実践することが一番肝心である。上人のみ教は、われらの求めてやまぬ現在より未来永遠の真実に生きゆく道——往生極楽の為——には只一向に念仏申すことである。御遺訓の通り

「念仏を信ぜん人はたとひ一代の法をよくよく学すとも一文不知の愚鈍の身になして尼入道の無智の輩に同じうして只一向に念仏すべし。」である。

念仏申してこそ阿弥陀仏の本願も信ぜられ、永遠に真実に生きゆく往生極楽の道も身についてくる。念仏申す行を離れては阿弥陀仏の本願も、往生も極楽もみな生きる事実の上で感ぜられぬであろう。宗教的生命は行にある。念仏申すほどの人は皆救われる。本願、阿弥陀仏、浄土等ありがたいことが分ってからお念仏申そうとしては、いつお念仏申す時がくるか分らぬ、ありがたいから拝むというよりは、拝むことによりてありがたいことが分ってくる、それが宗教的な進み方である。念仏申すことによって弥陀の本願も分ってくる、念仏が本願なることも念仏申すことにより体得される。念仏申す、その実践の中に、靈力——宗教的な力が出てくる、これなき時は自己もよろこべぬ、したがって他によろこびを伝えることもできぬ。「只一向念仏」するが上人のみ教の肝であ

り髓である。

○

法然上人は平常念仏を主唱された。御自身、生活の一切を念仏によって貫かれた。われらも上人をお手本とし、念仏一貫の生活のできるよう工夫してゆきたい。現代は忙しい時代だといわれている、たしかにゆとりのない、何かに追われどおしの生活をしている、こういう時代にこそおちついて念仏申す時間が必要である。しかしサラリーマンなど、ギリギリまで朝寝して、朝念仏申す時など持たぬ人もある、十分早く起きれば十分念仏申す時間はできる。しかしそういう念仏申す時を失った場合は電車なり汽車なり通勤の間に念仏勤行の時をもつ工夫するがよいと思う、雑踏、雑音の中に自分の耳だけに聞こえる御念仏は、格別におちつき、静けさを味えるものである、新宿や池袋駅のあの人の波、喧騒そのものの中に称名する時の静けさありがたさは称うる人のみが経験するのである。その他電車やバスを待つ時間、食事の前後、風呂へ入った時、一人散歩する時、眠ろうとしても眠られぬ時など、念仏申す時は随分あるもので、そうした中に念仏申さるるはありがたいものである。

○

在家の人は周囲環境の関係から、声高らかに念仏申せぬ場合がある。人生には次々といろいろな問題、悩ましい問題も起きてくる、大声はりあげて念仏申したいこともある、その

ような時は近くのお寺へ行行って思う存分念仏申すことである。「大念は大仏を見る」とか、声高らかに念仏申すことはうれしい。それにしても、いつ行ってもお念仏申されるようなお寺に念仏道場が各所にあってほしい。「時々別時の念仏を修して身をも心をもはげましととのえすすむべきなり」との祖訓のように、時折はこの別時念仏を修することは平常念仏、念仏生活の上にも大切である。忙しい現代人は月に一日、年に五日乃至七日位の別時念仏修養を行いたいものである。そうした機会が、自らの身心をととのえ進むこととなり、また人々にも念仏する機縁を与える最もよい時節となる。環境と設備の調うた念仏別時道場も各処に置きたいものである。

○

法然上人はこの念仏一行を専修せよとすすめられた。阿弥陀仏以外の諸仏諸神に帰依礼拝したり、念仏に不足の思いをして念仏以外の修行をすることは所謂雑行で、結局、あちらへ行ったり、こちらへ来たりでいつも麓でさまようこととなり一筋道を進んで頂上をきわめることができぬ。雑信仰、多層的信仰の多い現在のわが国にてはこの専修念仏一行を明にすることは信仰の純粋化の上にも大切なことと思う。

専修一行だからとて他の宗旨を排斥したり軽んじたりすることではない、それぞれの特色をもつ宗派宗学がある、青色青光白色白光でそれは尊重すべきで、そこに却って趣が深い。それぞれの宗派を重んじつつ有縁の一行を辿って共生きへ進

むが理想である。

専修一行——この事は私共の日常の仕事の上にも教られることである。あれをやったり、これをやったりでは一事として徹することはできぬ。

「行住坐臥にも報ずべし、彼の仏の恩徳を」とのみ訓も、「只一向に念仏」することに帰する。只一向念仏が仏の恩徳に報ゆることであり、また宗祖の御恩にも酬ゆる道であつて、法然上人七百五十年御忌の記念の最重要事である。

○

次に法然上人は日々六万七万の念仏を申され、その念仏の中に不斷に研学精進せられた芳躅に學んでゆきたいと思う。

上人の教は「只一向念仏」するにある、又「一文不知の愚鈍の身になして」とあるから學問などしなくてもよい、と考える人もあるが、上人のみ教は學問研究をおろそかにせられたのではない。上人御自身がそのお手本を示されている。「一文不知の愚鈍の身になして」のみ教は、念仏信仰の上に最も肝要なところで、馬鹿になれということではない、知ってゐることも忘れてしまえということではない、眞実に生きることは學問や知識や、才覚でできるものではない、それらの有無は救いに関係はない、阿弥陀仏の本願にうちまかせて念仏申すものが眞に生きられる、それゆゑに知識や學問をものだてず、才学や知能を加えず、ただ本願を信じて一向念仏申すものは一文不知の愚鈍の身になして申せとのお示しである。

阿弥陀仏の慈光に照されて自らの愚痴に気づかされ、この慈光のほかには救われる道なしと低頭合掌称名するが一文不知の愚鈍の身になして只一向念仏するもののすがたである。宗教信仰上經過せねばならぬ難関所といわれている自己否定とか無我とかいうことを、その名も知らずに、すらすらと通過して光明界に生きられるのが、この「一文不知の愚鈍の身になして」ということである。これは実にありがたく尊き浄土教の眞髓である、それをあやまって、學問研究の要なしと受けとったならばあやまりである。只一向に念仏するは、雑多な日常生活の事がらを念仏の中に統攝してゆくことである。洗面も食事も、洗濯も、仕事も、人との応対も、休養、睡眠も其他あらゆることを念仏をしつつ為す思いをしてゆく生活である。朝、称名念仏して出発し、如来光明裡に仕事に就く。夜就寝前に称名念仏して反省し懺悔感謝して、如来光明裡に眠りに就く。数珠の糸がたくさんの玉を貫いてまとまっているように、念仏の糸を以て日常生活が貫かれてゆく、それが只一向念仏する生活の相である。その中には自らの職務を中心に不斷の研究改善がなされてゆかねばならぬ。

○

法然上人は十三才叡山に登られ、四十三才専修一行の身になられる迄、三十年にわたる學問修行があつた。智慧第一と称せられた大学者であつた。學問といへばその頃は仏教の學問であつた、それは生死解脱の爲——ほんとうに生きる道

——の学問であり修行であることはいうまでもない。

「出離の志しいたりて深かりし間、もろもろの教法を信じてもろもろの行業を修す」と上人が述懐されているように、学問と修行とを兼ねて専心道を求められたのである。それ迄はもろもろの行業も修せられたが、善導の観經の疏によって阿弥陀仏の本願にふれられてからは、従来の学問修行は生死解脱の爲には無力なりとキツパリと捨てて、一向専修の身となられたのである。

しかしそれは学問無用という意でないことはいうまでもない。禅勝房に示されたお詞に「としごろ習たる智慧は往生の爲には要にも立つべからず、されど習たるしるしには、かくのごとく知たるは、はかりなき事なり」と。

○

それから上人はたえず研学をつづけられたのである。只念仏一行によって統攝されてゆく生活は、身体を大切にすることも、衣食住のことも、学問することもみな念仏の助業となる。学問することによって念仏が一層はげまれるならばその学問は念仏の助業である。

本願念仏に帰入せられてからの上人は、念仏裡に断えず学問もはげまれたのであった。

「われ聖教を見ざる日なし木曾の冠者、花洛に乱入のとき、ただ一日聖教を見ざりき」と、木曾義仲の花洛乱入は寿永二年で、上人五十一才の時である。その後も大原談義（五

四才）東大寺に於ける三經講説（五九才）選択集の述作（六五才）があつた。また多くの子弟教養の爲にも不断に聖教を翻き、講説をし、思索をめぐらし、念仏教義についても洗練と体系づけが為されたことと拝察される。浄土宗二祖聖光上人はその著『念仏名義集』に「大師（法然上人）菩薩戒を授け、その外三論宗の八不中道、華嚴宗の法界唯心、禅宗の直指人心見性成仏の法門を教えたもう云々」とあり、又聖光上人伝の中に「上人（法然上人）を見たてまつるに、毎夜の称名に疲労を顧みたまわず、連日の談義、晨より暮に至り、必ず老躰窮屈したまふことあらん……」とあつて、子弟の教授講説は朝から暮まで行われ、夜分に念仏されたことが分る。聖光上人がはじめて法然上人の禅室を訪ねられたのが法然上人六十五才、聖光上人三十六才の時で、それから前後八年法然上人に浄土の法門を学ばれたという。この一事を以てしても元祖上人が御老齢に至るまで不断に研学講説に精進せられたかが分る。上人七十七才、承元三年に書かれた一念義停止起請文というのがあるがその中には「私は叡山に学んだ昔から五十年間広く諸宗章疏を読み、叡山に無い書はこれを他門にたづね必ず一とおりに読んだ、鑽仰積り、聖教は殆ど読み尽した」とお述べになっている。

○

また上人が学問せられる態度は「学問に私なし」の態度であられた、学問上に於て、真理に関しては師と雖も一步も譲

ることがなかった。師の叡空上人と論争せられた幾多の物語りはそれを示している。「学生（学者）はかならずしも先達（先輩）なればということはない」といい「義の是非を論ぜんことはあながちに上古にもおそるまじきものぞ」と言われた。学問に私無く、是非を論ぜんこと上古にもおそるまじとは法然上人の学問に対する態度であると共に、それはまた竜樹菩薩の「真理なるが故に仏教なり」と称した大乘仏教の精神であり、さかのぼって仏陀釈尊の精神であり、また降って今日の学問的態度でなければならぬものである。

○

又上人の学問的態度に学ぶべきは所謂選択眼を以てせられたことである。生死解脱の道を求め、我身に応う法門があるかと選択眼を以て一切経も読破せられたのである。生死解脱に必要なきものや、我身にかなわぬ教は思い切って選り捨て真に生きられる道、我身にかなうもの、なくてはならぬものを選び取りられた。かくて選り捨て選り取る選択眼によって弥陀の本願念仏は阿弥陀仏の選択本願の念仏なることに到徹せられたのである。

この選択眼を以て現代に生きる私、及び一切人類解放の道を求めゆかねばならぬ。われらの学ばねばならぬこと、学びたいことが余りにも多い。マスコミにひきづられ、ジャーナリズムにあらわれること多く、あちこちして求道の本旨をあまり易い、かかる時、仏教の研究をはじめ人事百般につい

ても、この選択の眼識及び態度を以てせねばならぬと教られるのである。

かように上人の御生涯を見ると、不断の念仏が中心であって、念仏の中に学問研究がなされてゆかねばならぬと教られる。無論念仏者は学問せねばならぬという意ではない。救いの道は念仏一つである。学問が助業となる人は「学生骨（学者風情—学者ぶる）になりて念仏や失わんずらん」の誠めを銘記し、特に一枚起請文の結語「只一向念仏」の教の実践につとめたい。

新刊 浄土トラクト

在家の方々の為に

村瀬秀雄著

浄土宗勤行式の解説

新書版九〇頁
定価七〇〇円
送料八

待望の書「浄土宗勤行式の解説」愈々刊行

旧版「浄土宗日勤行式解説」を全面的に改訂、版も持ち易い新書版として刊行

（百部以上五分引送料無料）

これからの念仏

——生きることできる人生の立証——



大 野 法 道

(大本山光明寺法主)
文学博士

これからの念仏が、どのようなものとなるであろうかは、時勢の動向から将来を望見して、法然上人が打立てられた浄土門の念仏の実力が、漸く明らかになっていくことであろうと思われる。

これまでの念仏は、死に結合されていた。人が死ねば自然に念仏が取り出される。死に直面するか、またあらかじめ死の用意のためとしても、之が用いられる。死といえはすぐ念仏を連想し、念仏の声は縁起のわるいものとされている。それほど念仏は死と不可分の関係に置かれ、死に対する自他の解決が、そこにあるように見られている。死が生涯の幕の下りる、人生の最大の事件である以上、そこに

登場して人間におちつきを与えることができるのは、他の何ものの追従を許さぬ念仏の実力に相違ない。

しかし若し之を、ただ単に念仏を死に閉じこめるものとするならば、それは当たらない。なぜなら、念仏でおちつく事実が人生に送る周波は、いかなる生きる現像を映しだすか、測りしれないものがあるからである。

けれども之は、死を通してすることは確かである。念仏の立つ瀬は、ただそれだけなのである。死を離れたら念仏の行方は、一体どうなるのであろう。そのことは法然上人を見つめることによって明らかになって、今更らの如く、念仏の立場がはっきりすることとなるであろう。

上人が若い世代に真剣に取組まれたのは、人生をどう生きるかという、生の問題であった。追えども去らぬ人間苦に、前向きであったからである。そして仏教で修行して、ついに念仏こそ、浄土の通路であるという見定め、「生きていることのできる人生」の扉が、念仏の立証で開かれたのであった。「立証」とは、念仏が生きていることのできる事実を直顕することである。徒然草が伝える上人の面影は、

（作者の兼好法師は、即興的な感動をつけ加えているが）

ある人、法然上人に「念仏の時、ねむりにおかされて、行を怠り侍（はべ）る事、いかがしてこの障りを止め侍らん」と申しければ、「目のさめたらんほど、念仏し給へ」と答へられたりける、いと尊かりけり。また、

「一定と思へば一定、不定と思へば不定なり」と言はれけり。これも尊し。また、

「疑ひながらも、念仏すれば往生す」とも言はれけり。これもまた尊し。

は、その一片である。特に終りの一節は、他の法然上人を伝えるものの中に、全く見えない特異のものであり、教えの正面では信の具有を必要とする関門をつきぬけて、人間の現場で生きることのできる人生を、はっきりと念仏が立証している。

爾来、上人はその人生を生きられたが、それはおのずから、念仏の立証をふみかためる生活であった。しかし、そ

れは決して平穩無事なものではなかった。問題は次ぎつぎに暮しの中に押しよせて、ぶつかる壁は重なりあうばかりであったけれど、そこにこそ生きる意味があるのであり、事に当って壁を門に変える。念仏の積極的な立証ぶりに、今更の如く新らしい刺戟を受ける生活者となって行かれたのである。前に挙げた徒然草の一節に、壁は遂に壁でなく、そこに門の開かれるところが見えるであろう。

七十五歳で遠流の壁につき当り、とても再会は覺束ないと、なげき悲しむ人々に対し念仏し、

どこに居たとて、死ぬ時は死ぬ。命ちがあればまた遇える。命ちがなければ浄土で遇える。

と、さらさらと開かれた門へ入って行かれた上人であった。

かくして生涯の終りには、念仏の立証を満喫して、生きることのできる人生の最後の門——浄土往生に、やすらかに入ってゆかれたのであった。

つまり法然上人は、「生きることのできる人生」の広場を念仏で開眼し、自ら念仏に親しみつつ、生きることのできる自信を固めて行かれたのである。

生の問題と取組むことから、生きる広場の脈うつ鼓動を、念仏の立証に知った法然上人の生涯は、また、自ら生きることのできる人生を、身をもって立証するものではなかったであろうか。

念仏はよみがえる



竹 中 信 常

(大正大学教授
文学博士)

一 柏鵬時代

世はあげてヌーベル・バーク(新しい波)

の時代である。相撲の世界にも「柏鵬時代」がやって来た。日本の歴史の上で「白鳳時代」といえば、いまを去る千三百年ほど昔、

天武天皇の御代に大いに仏教が興隆した時代で、それにつづく聖武天皇の天平時代と並んで、日本の文化が仏教を背景として、絢爛たる花を咲かした時代であった。「柏鵬時代」は相撲の世界だけに限られるものでなく、現在

私共の生きている地球の隅々にいたるまで、新しい時代・若者の擡頭がきざして来ているのである。

昨年の秋、好機に恵まれてヨーロッパ各地を旅行したが、その時の印象もまたそうであった。ことに南ヨーロッパからアフリカにか

けてはその感が深い。いうならば、世界はいまや古い時代を新しい装いのもとに再び生氣づかしめようとしているものようである。

そうした機運はむろん仏教——日本の仏教——にもうかがわれるのである。そしてこの

ことは、日本にいるよりは外国に出てしみじみと感じられるのである。

欧米の思想界では、いま、ひとくちに「仏教ブーム」と呼ばれているが、実際に行ってみてそれが本当であることがはっきり知られた。

もちろんそれは日本を始めとした東洋の仏教とは大分ちがって、「信仰」というよりは「思想」としての仏教であり、それも一般大衆にではなく、ごく一部の思想家や学者に限られているようである。しかし、とに角、仏

教とは全然あいられないキリスト教の地盤に、新しいかたちと意味とで仏教が根をおろし始めているという事実からは、目をそらすわけにはゆかない。仏教にも「柏鵬時代」がやって来たのである。

二 念仏のヌーベル・バーク

仏教仏教と申しても、いささか広うござんす、である。欧米でいま話題にのぼっている仏教とは、そも一体、どんな仏教なのか。「禪と念仏」なのである。「禪ブーム」はわかるが「念仏ブーム」なんてあるのかと反問されるかもしれない。成程、おもてむきには「念仏」は出て来ないようである。しかし、キリスト教の素養に富んだ欧米人にとって、念仏を中心とする「浄土教」は非常に親しみが持たれ、したがってことさら「念仏」をとり上げなくともよいような気がするらしい。それよりも、自分達の宗教や信仰とは全くかけはなれた「禪」のほうに珍らしさを感じられて、禪のことをいうといかにも仏教をよく理解しているという錯覚におちいるらしい。このところが大切な点なのである。い

うならば「信仰的」には念仏に傾いているのだが「思想的」には禪にウェイトを置いて、これを表面に強く押し出しているのである。上智大学の教授で、すぐれたカトリック神学者であるデューモーリン師ですら、目下のところ「禪」に深い関心を示しておられるのも、こうした意味でみれば了解出来るのである。

ところで、念仏は一応背後にかくれているが、先にも述べたように、世はヌーベル・バーク、柏鵬時代である。いつ何時、念仏が新しい意味と装いをもって世界の思想界に登場して来るかわからない。いや、むしろもうそのきざしがみられるのである。皮肉ない方になるが、禪がはやればはやるほど、その反動として念仏が頭をもたげて来るのである。なぜなら、仏教の二つの大きな流れといわれる「聖道門」と「浄土門」あるいは「自力門」と「他力門」のこの二つの、それぞれ最も純化したものが「禪」と「念仏」なのである。しかもこの二つは、その最後のどんづまりに至ると「往生念仏」で一つになってしまうのである。だから、禪がブームになることの裏には、念仏のブームがくつついているの

である。それでは禪にばかり働かして、念仏は何もしないでズルいと言われるかもしれぬが、それはそれ「禪は自力門」で「念仏は他力門」だからである。

三 理窟を吹きとばせ

ドイツでバスにのった。最後部の席に坐つてフト窓の上を見たら、小さいハンマーがかけてあって、そのそばに「危険の際にはこのハンマーで窓ガラスを叩き破って逃れよ」と書いてあった。実に親切であり、且つ合理的だが、何だか危険の起るのを予想しているような気がした。ロンドンのハイドパークの公園で、若夫婦が乳母車に赤坊をのせて散歩をしていた。自分達は腕を組んで喋々囁々としているが、乳母車の上の赤坊は、革のベルトでしっかりとゆわえつけられていた。理窟には合っているが、これもまた何かいやな気がした。

このように、ヨーロッパではすべてが合理的であるが、余りキチンとしてしまって、何か物足りないものが感じられる。四六時中こうした生活をしているヨーロッパ人が、ヌー

ポーとした東洋的なものにあこがれるのは無理のないことだと思った。そこへ「禪」が来た。理窟も理論も吹とばして、頭から痛棒を叩きつけて来る禪には、ヨーロッパの合理主義や人間中心主義はてんで齒がたたない。だから、逆にこれにとびつくのである。そして自分達の余りにも合理的な生活の息苦しさや、人間中心主義の行きつまりを、禪によって解決しようとするのである。禪がはやるわけである。

当り前のことをいっていたのではダメである。禪問答はわからないからよいのである。理窟でワリ切れるところには宗教も信仰もない。理窟でワリ切るといふ、そのワリ切る自分分はそれではワリ切れるかという、そうでない。結局、宗教というものは、「自分」をみなおすところから出て来るので、自分をぬきにしてものごとを考えたり処理したりする哲学者や科学者には信仰は芽生えない。毎日、起きて、食べて、働いて、ねる。この現実の生活の中に宗教があるのである。おこったり、泣いたり、喜んだり、苦しんだりするこの現実の「自分」を出発点とするのである。

る。ことにこれからの宗教——特に仏教は、この二つ、すなわち「理窟を吹きとばす」と「なま身の人間を見究めること」との二つのいづれを欠いてもダメである。むづかしい言葉でいうならば、「非合理性の強調」と「人間性探求」ということになる。そして、この二つをそなえているものが、一方では禪であり、他方では「念仏」なのである。

四 一文不知

念仏を鼓吹し、浄土信仰をひろめるための現代に課せられた問題は、世間で近頃よくいわれるような、合理化と理論化ではない。最近は、えてして、ものごとを、一見、理窟に合ったように説明して、それで現代的であると思いがいしているものが多いが、こと「宗教」の世界にあってはむしろ逆である。「浄土は実在する」「極楽は西方にある」のである。それを否定するような現代科学なり、現代思想なりを吹きとばすべきである。

天人師であり、大導師である仏者が、何を血迷って凡下の理窟に膝を屈するのか。結局は自己省察の不足が「自信喪失」をきたし、

扉の御法語

強いて信じようとしめない人に対しては、み仏といえども手の下しようがないのであって、我等凡夫のとうてい力及ばぬ相手であります。かと申して不信の人々を捨てて省みないということではなく、このような人々にもみ仏の光明に浴させ、お念仏を唱える人とするためには、まず以てわたくしたちが、極楽往生をし、穢土に還って衆生を救い、一切衆生とともに往生を願わなくてはなりません。

ここにも極楽往生を願うのは、自分独りが救われればよいというのではなくて、衆生とともにという根本の願いがうかがわれます。それと同時に、不信の人を相手に非難したり論争したりするばかりであく、先ず自分を修めることを忘れてはならぬことを教えられています。

さて扉の御法語は「津戸三郎へつかはす御返事」であり勅修御伝第二十八巻にあります。津戸の三郎は熊谷次郎直実と同じ武蔵国の出身で武勇の誇れ高かった人でしたが、合戦度々の罪を懺悔して上人のお弟子となりました。

するとある人が「熊谷の入道にしても、津戸の三郎にしても、どだい何も知らない連中だから上人は余行を教えても無駄であ

いたづらに、世間の常識に迎合しようとするにすぎない。何故、堂々と自己の念仏体験を標榜して、世間的小智をはねとばさないのか。

念仏が禪とともに、世界の思想を風靡するに至るのは、もうすぐのことなのだ。念仏には他の宗教、いや他の仏教宗派にみられぬ、きびしくも、なまなましい人間省察が基本となっているのである。「一文不知の愚鈍の身」。まづ、ここから出発するのが、浄土教に課せられた現代の使命である。

五、ハダカの念仏

さいわいに私達は会いがたい七百五十回の御遠忌に会うことが出来た。御忌そのことの盛事はむろん喜ぶべきであるが、それ以上に大切なことは、これを八百回に、九百回、千回に、無限にと大きく引きのばしてゆくことである。うしろむきの御忌ではなしに、前むきの御忌にしなければならぬ。それにはどうしても「現在」を出発点としなければならぬ。

七百五十年の歴史の上に、新しく築き上げて行く「念仏」とはどのようなものである

か。それは、あらゆる殻を破った、素裸の念仏でなければならない。もうすでに世界は地球だけに限られた世界ではなく、宇宙的世界になっているのである。禪も世界にひろがっているのである。ここらで「念仏」も「浄土宗」とか「仏教」とかという、せまい「カラ」をぬいで、のびやかな、自由な「念仏」にならなければ、二十一世紀の歴史にのびて行くことは出来なくなった。

素裸の「念仏」とは一体どのような念仏なのか。それは「自分」が素裸になることにほかならない。自分がハダカになって、あらゆる障礙をのりこえて、ただひたすらに念仏する以外に道はない。理窟だの理論だのを気にしては念仏はとなえられない。まことに宗祖のおおせられ、うれいられているとおり現在は「学生骨となりて、念仏やうしな」われてしまっている。念仏——素裸の念仏——これをもう一度とりもどしてこそ、その上に念仏のよみがえりがはたされるのである。

「ただ一向に念仏すべし」この一句を体現することが御忌本然の意義であらう。

るとされ、お念仏だけを教えたのである。彼等に智才があつたらその他の学問も教えられたであろうに」と悪口をいいました。これを聞いた津戸の三郎が上人にお尋ねしたところ、上人は詳細な御返事を認められました。

阿弥陀さまの本願は、有智無智、有罪無罪、善人悪人、持戒破戒、賢愚等の区別をするものでありません。念仏の行に適する人があるとかないとか申す人は、あえて毒心を含んで争いを起し、念仏弘通を妨げる人であります。上人は経文を引用してこれらの人のことを「生れてよりこのかた仏法の眼しいて、仏の種を失へる闍提の輩なり」と痛論されています。また「大方弥陀に縁あさく往生に時いたらぬものは、きけども信せず、をこなふをみては腹をたて、いかりをふくみて、さまたげんとすることにて候也」と申されています。

無理にでも反対しようとする人、本願の何たるかも知ろうせずに、あくまで反対しようとする人、かかる人を相手にしてはどうにも力の及ばぬものであります。従っていかに相手が謀りごとをめぐらして悪口をいつてきても、かかることに心動かすことなく、あくまでもお念仏を唱え、自分が往生することによって不信の衆生をも済度し、結局は一切衆生ともどもに往生を願うべきであります。

宗祖法然上人 750 年御忌記念

座 談 会

法 然 上 人 を 偲 ん で

司会 法然上人がお亡くなりになられてから、今年は丁度七百五十年の御忌をお迎えして居ります。しかも、今日は祥月御命日でございまして、この日を記念して座談会を開催いたしました。

本席は、しずかに法然上人のお徳を偲びながら、法然上人を語っていただきたいと思います。

最初に御挨拶をかねて、佐藤先生から、どうぞ。

佐藤 まことにお忙しいところ恐れ入りました。只今、司会者のいった通り、法然上人が亡くなられた御命日でございます。今日こそ、法然上人の七百五十年目の本当の御遠忌の御命日にあたるわけですが、その日に、皆様に、法然上人を語っていただきたいと思えます。かならずしも史実によらなくとも、皆様の目に映じた法然上人を端的にお話したいだければ結構と存じます。

日本仏教における元祖法然の位置

司会 いままで、法然上人が語られる場合救済者としての立場とか、宗門であります

出席者

(発言順)

佐田 密雄

(大正大学教授
文学博士)

武田 泰淳

(作家)

仁戸田 六三郎

(早稲田大学教
授 文学博士)

司会 宮 林 昭 彦

とき 昭和三十六年一月二五日

ところ 池 端「鉢ノ樹」

ば、宗祖としての法然上人が語りつたえられて参りましたが、人間的な面の法然上人もふくめて語っていただければと思います。

私たちは、大師さまといえば弘法大師をいならわし、元祖さまといえば法然上人をよびつたえて居りますが、この元祖ということとは念仏門を開かれた元祖という意味と、もうひとつ、日本仏教の元祖ともいうことが出来ると思えます。その意味で、まず、日本仏教の歴史のながれのなかにおける法然上人の位置づけをしていただきたいと思います。

佐藤 日本仏教の元祖ということは、いい



右より 佐藤・武田・仁戸田の各氏

かえれば、鎌倉仏教の元祖ということで、鎌倉仏教は、法然上人からはじまったということなんです。鎌倉仏教というのは、浄土、日蓮、禅などで、念仏と題目と、そして坐禅の三つが、その象徴をなしているといえると思います。これは何かというですね、それまでの仏教は、つまり仏教とはいうものの祈禱仏教だったんですね。

そもそも仏教というものは、出家をおこなうために日本へ入って来て、その出家に供養することによって、幸福をえようとするのが大体当時の日本の受けとり方だったと思うんです。だから、お坊さんの神秘な力を利用して病気を直そうとか、源氏物語をお読みになってもわかるように、将軍が発熱した場合に、まず第一にすることは何かというと、祈禱僧をよぶこと、鎌倉八幡宮にお酒を献上すること、それでも直らないと、源氏の神さまである三島神宮へ使いを出したり、馬を献上させたりする。それでも直らないと、何処かに異変がありはしないか。たとえば、私の住職している鎌倉大仏のちかく、長谷あたり

ねばならないという事になって、建長〇〇年かに供養した。すると一週間目に将軍が執務をとっている、というのです。吾妻鏡などをみても、熱がころっと下った、と出ている。

そのように、鎌倉時代は、医者と祈禱師は一つであったが、そういう仏教と区別されてともかく、お念仏して極楽へ行く、題目を唱えて成仏する、坐禅によって悟る、というように、宗教がはじめて日本でつくり上げられた、ということになるんじゃないか。

つまり、仏教全体からいえば、純粹でなかった仏教を純粹にしたということになるし、信仰の形体からいっても、仏教の信仰が、そこからはじまったと考えられます。それは丁度古代が終って中世がはじまる源平時代に、法然上人があらわれて先駆をなされました。

法然上人によると、すべて念仏のなかにふくまれるといわれるんです。ある人が「物忌にすべきでしょうか」といったとき、「物忌などは神主がするものであって、仏教徒がするものではない」というような、激しい言葉さえ使われて居られます。

そのように、念仏一途に純粹化され、民衆

化された仏教というものも、現代では、お経やお念仏もやや呪術化されている面もあり、又、本来の宗教じゃないようなものも、仏教のお寺に附随しているものが、多くあるといった状態になって来ていると思われます。純粹な宗教というのが法然上人により示され、実証され、それに続いて、日蓮、道元、栄西というような人々もなされたのであるといえましょう。

法然の人間像の偉大さ

司会 佐藤先生からお話もございましたが、法然上人は、外来の受容された仏教を日本的宗教として確立された。いいかえれば、日本民族の肌にとけ込ませたともいい得ると思います。そのことは一面、上人が非常に時代意識に敏感だったといえると思うんですが……、武田先生いかがでしょう。

武田 僕もね、実にえらい人が出たものだと思うんですよ。それでね、映画で親鸞というのがあったんですがね。そこ

で、法然上人のお説教なされるところの場面があるんですよ。それは、雨が降ろうが、陽が照ろうが、ずうっと民衆は集まって、その奥の方では、法然上人が静かに語っているんです。それがまた、非常に浄土宗の人にとっては親しみのある、発願文とか、一枚起請文とかからとっているわけなんです。観客は、はじめて聞けらしいんです。すると、非常に感心するんだな、つまり、キリスト教の方では映画でも繰り返し繰り返し山上の説教にしても、大切な言葉を耳にしているわけでしょう。ところが、まだまだ浄土宗の方は、はじめて聞く人が多いんだな。一番大切な言葉をね。誰れでも救われる、とか、念仏さえ唱えればよろしい、とか、どういう風な人たち



武田先生

で念仏してもよろしい、とかいうことをね。そこで、ショックをうけてだね。というのは、そういう宗教が日本にあったか、という考えがある。だから、一般の町のアンちゃんなんか反感を示さない。むしろ、えらいとは感ずるが、そのところは矛盾を感じないんだ。むしろ、親鸞上人が御結婚なさるとき何故、あんなに苦しむのか、ということの方が理解できないんでね。法然上人の言葉の方が、親しみがあつたというのは、いまでも、まだまだ説教が足りないんじゃないか。つまり、鎌倉時代に要望されていたことは、やはり、今の人も要望しているんだが、まだ、耳に届いていないんじゃないか、そういうような感じがしました。

そのとき、僕もこのことは活字では読んだけれども、耳に聞えてきたのは、しばらく、とだえていましたから、やっぱりいいと思った。

もう一つは、僕は、法然上人という方が好きなんです。人間的に好きなんです。何故好きかというね。何か安心して、信頼できる人。たとえば空海ね、弘法大師のような方

は非常にデモニッシュな、知的な力があって、すべてを支配するような力がお有りになったかもしれないが、何んだか近づきがたい。けれども、法然上人は、だまってそこに坐っていると、何となく、こっちが恐らくその当時生きていたら、顔を見ただけで、しみりとした気持ちになったんじゃないかと思うんです。僕

のおやじ（大島泰信師）は、好きだったんですね。好きだけれども云わないんですよ。云わないけれど、法然、と云ったときに、とても嬉しそうな顔をするんだな……。

佐藤 そうかね、人柄もよく似ておられたからね。

武田 何かね、だけど、自分は勿論、そういう人間でないということは知っていますからね。ただ、憧れみたいに、こういう人間が居てくれたらいいなあ、というものが、おやじの頭のなかにあってそれが、法然さんだったらいいですよ。だから僕もね、自分で、色んなものをこたごたやって癪癪など起したり、悲観

したときなんか、ああいう人がいて呉れたということが、とても有難いというか、何か絶望しないですむというか、現実には、なかなかいないですよ。まず、御忌に際して、それが、虚言のないところですね。

厳しさを包む人格の円満さ

司会 いま、親鸞という映画のお話がありました。よく、法然上人と親鸞上人が比較される場合、親鸞上人は人間味ゆたかで、ドラマにも、小説にも、なるけれども、法然上人の場合は、あまりにも聖者すぎて、人間的つめたさを感じるともいわれるんですが、その点はいかがでしょうか。

武田 佐藤春夫さんが、法然上人のことは掬水譚のときから、ずーとやって来られましたね、戦争の一番激しい最中でしたか、念仏という事をいい出したんです。丁度日本が侵略をはじめ直前に、南無阿弥陀仏は、自分が一番いい、といった気持は、やっぱり相当深いものがあつたと思うんです。それが、今まで続いてあつた。

日本にカトリックというものはないですか

らね。だから浄土教にもカトリック的な役割りもあるんだな。非常に、民衆的な面もあるけれども、だから、必ずしもそういう風にいいないんじゃないですかね。

親鸞をもし本当に芸術化しようとすれば、さっきいったような、法然の法縁に参画したというところが、クライマックスなんだな、発端ともいえるでしょうがね。だから、それは長い目でみてみなければ、それをいまず判断することはできないと思います。

佐藤 仁戸田先生ね、法然上人の人格の一面をあらわす言葉にね、ある人が、お酒を飲むべきでしょうか、と尋ねたら、法然上人は「まことには飲むべくもあらねど、世のならい」と仰言った。これは、なかなかさうと出て来ないんだね。仏教の戒律とか、とくに持戒堅固であられた法然上人を、我々のような考えからいけば、一寸そこにこだわって、「世のならい」などとさっと流して「飲んでもいいよ、だけどいけない事は、いけないんだけれども」というように、軽く出ないと思うんです。そこに、何か厳しいものを乗りこえてこられたものを包んだ円満さが、あるん

じゃないかと思うんです。

仁戸田　ぐっときますね。

佐藤　どんなものでしょう、先生はお酒を召し上がるので……。

仁戸田　徒然草のなかにですね、酒飲まぬやつはばかだ、色気のないやつと同じでね。酔っぱらって悪酔いするやつもやっぱりばかだ、ほどほどの酒がいい、ということをしるにいらしてはいますね。その兼好法師が、法然上人のはなしを、徒然草に引用していますね。御存知だろうと思うんですが。

「お念仏を唱えていて、居ねむりをして知らないうちに眠っちゃった」というんですね。そのことを法然上人に尋ねたら、眠むたくなったら居眠りして覚めたらお念仏すりゃいいじゃないか、とお答えになった。この話を聞いた兼好法師は、まことに有難い立流なお方だ、と仰言っているんです。

先程のお酒のことについて、佐藤先生の仰言ったことが、やっぱり法然上人をほめている兼好法師のことですから、そ

の辺やっぱりどこか相通ずるね、相寄るたのしさというのですか、これも御仏縁ですよ。ね。(笑)

日本の宗教改革者としての法然と西洋の場合との対比

—世界的ヒューマニズムの宗教—

司会　日本の宗教改革者として、よく法然上人があげられ、西洋における宗教改革と対比される場合があります。もちろん、洋の東西ということ、地理的条件、事情などで色々異なると思うんですが、その辺、このたび外遊されていかがでしょうか、仁戸田先生。

仁戸田　それは、まあ、佐藤先生も私よりぐっと深く、広くお感じになったと思うんですけれども、司会者の方からのお名指しですので申しあげますと、僕はね、話が少々ピンボケしますけれども、洋の東西を問わずですね、信心どころというものは、やっぱりあるべきものだし、実はあると思うんです。

法然上人の場合と、西洋の場合を比較してみますと、誰れと波長があうかというようなことは私には分りません。測定してみません

がね。だけど、先程、佐藤先生が仰言られましたですね。本当の仏教は法然上人からはじまったんだ、という意味が、加持祈禱の仏教というものを、切りはなしたというところにある、と仰言いましたが、私も兼ね兼ねそう思っているものの一人なんです。これを、また違ういい方で申しますと、プロの仏教が、アマチュアの仏教に転換された、ということですね。これは、キリスト教でいうならば、いまいう軟派のビート族が、ミラノで懺悔して、百八十度かわって敬虔な信者となった、というようなことですね。悪にも強いかわりに善にも強いといったようなことから、この人間の信心も、罪深い罪というものを、ひとたび回向すれば、立ちどころに人間は浄土の方へ向って進むのである。これは、キリスト教でいえば天国でしょうが、丁度、そういったようなことのおこったのは、日本も中世ですし、西洋も中世なんです。そこに何か御因縁があるんじゃないかという気が致します。

まあ、いふなれば、先程、武田先生も仰言いましたように、まだまだ法然上人の御人格

とみ教えは、語り足りないんじゃないかという言葉は、ぐっと私にもきましてね本当にそうだと思うんですよ。

それというのはですね。この限られた人達に、將軍が病氣になった、それ呼んでこい、それあそこへ行け、といったようなサークルで仏教があった。ところが選択集の念仏為先の主張というものは、最高最善の法を、最低最悪の衆生に及ぼしたということですね。これは、キリスト教が、もっと深まったアウグスチヌスの原罪説と相通するものであって、結局私は、日本の仏教が、ほんとうの人間の仏教をつくったのは、法然上人がはじま



仁戸田先生

りだと思うんです。つまり、私流に申しますと、ヒューマニズムの上に仏教というものを新しく置き直した。加持祈禱とか、印をむすぶとか、護摩を焚くとか、色々の手だてがありますが、これは、下品下生の衆生には適應できないことで、特別な人にだけ適應するもので、これは、ヒューマニズムからは、ちょっと遠いんじゃないか、と思うんです。かたがた現代という時代はヒューマニズムの時代でありますしね。

あれも人の子樽ひろい、というわけですね。まあ、私も、ことにそういう例だけ頭に先に来るんで恐縮ですけど、あの室の泊りのくだりなどは、もっとも現代的じゃないかと思うんですね。ですから、この御遠慮に際しまして、私どもは、東洋西洋を超えまして、ジェット機的世界の路線において、法然上人の仏教は、国際的なヒューマニズムの宗教であり、信仰である。従って、どんと来いどんと来い、又、どんと行け行けという気がするものであります。

司会 教団もおなじように力を充分發揮したいものです。

法然の仏教は民衆的在家道のおしえである

佐藤 いま、ヒューマニズムというのがあったけれども、私は、法然上人の仏教は、戒定慧の三学のうち、戒学の一つももたず、むしろ、戒定慧の三学という仏教の本格的な修行の道は、我々は通ることができないから、念仏往生する、ということです。浄土宗義の上からいえば、浄土宗以外の、そういう修行する仏教が聖道門、それから念仏の法は浄土門といわれます。これは、法然上人の時代の坊さん達が、何をしていたか、ということも考えねばならないが、親鸞上人は結婚して、半俗半僧になったといわれますが、七百五十年のちのいま、いえることは、念仏の方は在家の仏教、法然上人が聖道門とよんだものは出家の仏教ということになるんじゃないか、と思うんです。

おそらく、カソリックにしたところで、あの童貞さまや処女さまは、只拝んだ人よりは功德があるには違いないが、教理上はともあれ、実際上は、それと同じだと思うんですが

出家は、第一性欲を中心とした現世の欲を断っているんだ。そのほかに来世の欲も断っているんだ。現世の欲も捨て、来世の欲も捨てるような犠牲を払っていく修行者に供養するから、供養した仏教徒は現在よりも、良いところへ生れるというが、かれら南方の仏教信者は、決して出家と同じ処へ功德をうけるのじゃないんです。

ところが、浄土教というのは、そこに出家も在家もないんであって、出家というのは在家の先導者であって、今日の如きは現世の欲望も何もすてておらない。

これは、出家も在家も、指導者、先達もそれに導かれる同朋も同じように極楽へ生まれる。極楽へ生まれて、仏になるとかならんとかはともあれ、当面の目的は、いいところへ生まれるというのである、これは、仏教のなかからいっても

在家の仏教、在家道の仏教であって、出家道の仏教からいえば、もう一段と違ったものである。そして、宗教というものが、一番高い度合に來たものは何かとい

うと、特別の修行をしているものだけが、受けるものではなくて、指導者も信ずるものも一応同じような幸福なり、功德をうける、ということになる。

だから、浄土教には、特別の修行というものはないんだ。在家の生活のなかに求められるものだと思うんです。

いま、仁戸田先生がヒューマニズムと仰言ったが、他面、在家道の仏教というものが確立したのであり、七百五十年御遠忌の機会にもう一度、在家道の宗教、民衆の仏教という問題を明確にして、この御遠忌が浄土教の新出発点となれば幸いと存じます。

仁戸田 出家というものは家出でしょう。佐藤 そうですよ、人間の出来ないことをいっているんですよ。

法然の人間平等論

—最大の難事業を最もやさしい

方法に於て発見—

武田 それは、その通りなんですがね、ただ、法然その人に則してみると、あの通り非常に勉強なされた。何回もくり返されて大蔵

經を読まれて、悩んで居られた方ですね。

あの対決は、大原問答でしたかね。

佐藤 そう、新仏教と旧仏教の対決は大原問答です。

武田 大原の何といたしましたか。

佐藤 勝林院です。

武田 そうそう。僕は勝林院へ行ったんですよ。偶然だったんですがね。地勢なんかをみて、あの時のことを考えてみますとね、ぞくぞく集ってきた、えらい坊さん達は全部敵だったろうと思うんですよ。そこへ法然さまが乗り込んでいった、ということは、巖流島の対決なんかより、もっと知的な、日本の根本的な対決だったわけですね。そのときの、法然上人の勇氣というかな、勇氣というのは、必ずしも自分の一つの宗派をここで確立しようとか、自分が、あいつらに勝ってやろう、とかいう考えではなかったと思うんですね。もし、そうだったら勝てなかったと思うんですよ。そうじゃなくて、相手方の学僧も同時に、同じ人間、自分のまわりに集まって来ている人間と同じ人間と考えて出かけて行かれたんじゃないか、と思うんです。

法然上人は、人間平等論だからね。人間平等論だから、相手がいくら学識であろうと、同じわけだから、そのときの、法然上人の精神状態は、相当高いものだったんじゃないか。それは、そういう聖道門における完成というか、徹底性があるって、しかも妥協ではなくて、念仏というやさしい道を発見された。そこが何んともいえぬ、えらい人だったんじゃないか、という気がするわけなんですよ。

だから、かれの場合、一番やさしい方法を発見したというのは、実は一番困難な仕事をなし遂げたわけでしょう。ところが、我々が、やさしい、ということだけ云っちゃうとね、法然上人のえらさというのが、ぼけるんじゃないか。それは妥協ということは、絶対にしなかった人だからね。

僕はね、あの人、何故これに考えたかという、二つあると思うんですよ。やさしい道に近づいた事にね。

一つは、死の問題ね、死が平等に与えられているという問題と、それから、あ

の当時、日本国民に一番坊さんとして親しくつき合っているね、おそらく、遊女や強盗などともつきあっていた。この人間存在の生の平等ということと、死の平等、この二つの問題と念仏を結びつけられたのですね。もっとも人間的ですよ。七百五十年御遠忌には、よく強調されねばならないと思いますね。しかも、これを確立されるまでの苦労があった。それがしみじみと伝わってこなくなっちゃうんじゃないか、そういう心配があるんですね。

佐藤 それは確かにそうね。武田さんの仰言つるように、法然上人が勝林院にいくというの、我々の想像以上のものだろうと思うね。



佐藤先生

仁戸田 それから、四国に流されて行くといったこともあったね。

佐藤 あの時も、流罪はかえって恩寵だといわれている。

あの室の遊女のところは、さっき仁戸田先生も仰言ったけれども、法然上人を知るにはいいところだと思いますね。吉川さんの新平家物語も、あそこがよく書かれてあるしね。

武田 感動しますね。

佐藤 もう一つ、平重盛のところだね。実際にあったかどうかは問題のことですけど、新太平記としては、仲々おもしろい。

易行道と難行道

司会 武田先生の仰言ったことで、仁戸田先生ひとこと。

仁戸田 やっぱね、この親の遺産を食い潰して飲み潰おしていく、道楽息子のいるようにね。やっぱり法然上人があゆまれたプロセスの苦しみを、この御遠忌にあたり、この偉大さが、濡手で粟で出来たものじゃないということもあわせて、つまり、ひとつの人間構成、すなわち人間学的な角度から、もうい

ちど再確認する必要があるんじゃないかと思うんです。

しかしながら、私は愚鈍なもので、愚問を発するわけなんです、その点を強調しますと、この易行道の、難行道に対する易行道の線ですね、これが普通一般に、すこしヒビが入ってくる、それはつまり誤解なんです、易行道をたてるためには難行道を通じなければならぬんじゃないか、といったようにとる人もあるんじゃないか、そうすると、念仏為先の易行道の線が、異安心的な線で動揺する可能性がある。

この門を開いて、実はそういうものじゃないんだと、いわゆる三心論ですね。つまり、法然上人の仰言ったことと、そこまでに至る法然上人御自身の憂き難、といったようなことと結びつけなきゃならないけれども、これは、ある線では、切きはなして考えなければならぬ、ということですよ。これが、法然上人のおしえを現代に生かす、という方法の問題で、ささいなことですが、私は、

ちよっとそんな気がするわけなんです。

司会 たしかにそうですね。

仁戸田 裏をかえますと、この念仏を唱えれば、浄土に往けるんだ、という上人の、やさしいんだ、と仰言っておられることは誰れにもやさしいことなのか、法然上人御自身やさしいことだ、とお考えになったことなのか、深さと広さをもっていない私なんかにはちよいちよい疑問になるんです。言葉は同じでも、内容の格差がそこにあるんですね。

いわゆる、信心というものはなくてですね念仏を唱えれば忽然として浄土が訪れる、といったようなことから、へり屈がはじまりますがね。これはどうもなまじっか知恵がありますと、法然上人の仰言ったことが、一番むずかしいじゃないか、と、逆説みたいものが飛び出ちゃうんですね。それは、いま非常に効く薬が出廻っておりましてね、私ども明治生まれの人間は、漢方薬というようなものでヂワリヂワリ（笑）煎じ薬をせんじて飲んでね。昔は、肺炎になりますと、もうしめきつてね、めばりして部屋を温ったためて、フキンに芥子をぬって胸にはって電報を方々に打つ

といったようなわけだったんですが、いま肺炎になっても、ペニシリンなど注射しますと、一週間ぐらいでこのこと会社に出かけられる、いわゆるインスタント時代ですね。そういうことになれていますと、念仏唱えていると、数は百万べんでなくとも、ある数唱えれば浄土へ行つて借金取りもうぐいすの声、というんじゃないか、きわめて強いんじゃないかと思うんですね。

佐藤 浄土の易行道といっても、易々たるものじゃない。これは、法華難思の坂、浄土難信の道とあるごとく、法華経は思惟する、道理を考えて悟るということは、本格だが思い難く、仲々理解しがたい。それと同様に、浄土は信じがたい。これを信じていくところに浄土教の易行道の一番むずかしい問題がある。

どうして、これは信じ難いかというと、現在でもよく分る。現代の坊さん達は、何かしら理屈をつけて、仏教的原理を裏づけして、極楽というのはこうだ、というような説明をする。そして、むづかしくしている。むづか

しくしている、というのは難信ですね。

信じさす、自分も信ずるということができないから、それを振りかえているんですよ。それを振りかえて、浄土だって、そんな高踏無形なものじゃない、ということを経験によって、

仁戸田 振りかえているでしょう。その振りかえ手形が、現代は段々通用しなくなってきたね。

佐藤 法華難思のような理論を浄土教のお説教でも、宗学でも説こうとするものだから分らなくなってしまう。だけど、これは絶大な勇気をもって信じせしめねばならんし、又信ずるにも、やさしい程信じがたい。

たしかに法然上人のように、苦勞しておいでになった方か、さもなくば全程純心な気もちで精神とたたかわねば、信じられぬものだ。その点でむずかしいと思うんですよ。

司会 たしかに、信じがたいものを克服するのは、難行をやると同じくらいのむずかしさだと思うんですが、いかがで

しょうか、武田先生。

最も自然的、必然的な言葉

―南無阿弥陀仏―

武田 そうそう、それでね、僕はね。往生ということ、割にすなおに信じられるんですね。信じられるというより、往生というより仕方がないんだな。人間の持っている動物性とか社会性、人間のもっている矛盾をつきつめていくとね、往生するというのは、否応なしに必然のような気がするんだね。その必然なものを象徴する言葉がね、南無阿弥陀仏ということなんだ。まあ、これは理屈になっちゃうけどね。

僕は、南無阿弥陀仏というのは、人間の必然性をあらわすのに、象徴的な言葉で法然上人も考えて居られたのではなからうか。それを、一つ一つ説き聞かせるよりも、極楽とか往生とかというものを、はっきりいってね、念仏を唱えれば救われると。それは、虚言いっつわりのないことなだけけれど。それを獲得する方法として、どうせ往生するなら、難行道をやってもいい、と僕は思うんだ。しかし

やらない人には僕は反対しないんだよ。

だから、むしろ念仏を唱えて、食事をしているお百姓さんなんか、好きなんですがね。自分は仲々そうできないから。そう考えると往生ということ、自分においてどう考えるかということによって、信心というのは決まるんじゃないかな。

往生というのは、往って生きることでしょう。往って生きるということは、どういうことだろうか、僕は僕なりに考えているんだ。だから、学問的にいっても、法然さんの云われたことと、ちっとも矛盾なく感じられていくわけなんだね。それを、僕は、人にそれをどういう方法でいうか、ということを考えるよりも、まず先きに、自分が往生ということはどう考えるか、ということはずうっと考えているわけなんですよね。

法然上人の文章というのは、充実していて無駄がなくて、わざとらしくなく、徹底している。それは何かというと、やっぱり、人間の上にのしかかっている何かを、自然のようなものを、完全な形ちで把握していたんじゃないか、と思うんだ。だから、それが、ど

仏祖のことば③

鉄のさびは

鉄をむしばむ

宮 林 昭 彦

鉄より生じたる垢穢（くそ）（錆）が、鉄より生じて鉄を蝕（む）ばむごとく、自己の業は悪業者を悪趣に導く。

人間は一人では生存できない。それは、社会的存在だからである。もし、私たちの生存が、すべて他に無縁のものであるとしたならば、なにを為そうが、その人個人の問題としてすむかもしれない。

しかし、社会的連関性の上に存在する私たちであってみれば、一人よがりな、身勝手な振舞いはできない。何故なれば、一人のなした行為が、善かれ悪しかれ、他に直

接あるいは間接に影響を及ぼすからである。

身から出た錆は、自己のころを蝕（む）かりではない。他のころも傷つけ蝕（む）んでゆくのである。ささいとおもわれる一寸とした悪業も、鉄より生じた錆が、やがて鉄自身をも腐蝕（む）するごとく、自己を破滅にみちびくのみか、社会全体を暗い谷間につき落とすこととなる。

わが身にふりかえってみても、心にささった刺は、いつまでも心にうづきを覚える。それが影響して、ほかのことまでがもうように進まないことは、日常においてよく経験するところである。

うしても念仏ということになったんだから、そうすると、僕らも、法然上人までは、深いところは考えられないけれども、自分という存在がどういふふうにあるか。

世界のどこかにいて起っている犯罪に対し、全く無関係にあるということとは云えないですから、その意味でも、僕は一番すなおに受けとられる考え方なんだな。

ほかの、いろんなテーゼがありますよ。平和共存というのね。実際は平和共存じゃないわけなんだ。

ところが、南無阿弥陀仏と法然上人が云った時には、何らの野心もなければ、権力も保持しようという気持ちもない。本当にこれを云わなければ仕方がないから云われた、と思うんですよ。それが尊いんだな。言葉は時代時代で新しいものが、どんどん出て来るんだけれども、こういう言葉は、仲々ないんですよ。

仁戸田 そうですね。若い人が「チャオ」なんていうのを止めて、南無阿弥陀仏といった方が余程いい。（笑）

司会 本日は、いろいろ有難うございました。ではこの辺で、

逆に、善をなす場合をかんがえても、誰れにも評価されず、つまらないと思われるようなことでも、それが、どんなに、まつわる人びとによろこばれ、はげましの力となっていることだろうか。

社会の片隅に見すてられていることであっても、人間の善意によってなされていることは、長い年月のうちには、きっと社会の一翼となるように、ひろく人びとの心の中にその光を発輝するにちがいない。

悪業が心をむしばむと同じように、善業が心をおおうとき、それは、すべての生の場面に現われてくる。

さすれば、人間の行為においては、その結果いかんということは、無論大切であるが、むしろ、それにより心を蝕ばんでゆくさびについて考慮がはられねばならない。失敗しない方がいいが、万一失敗したとしても、それによって、心を腐らせる方がおそろしいことである。

ながい、私たちの人生において、春風駘蕩たる海をすべるがごとき航路ばかりではない。つよいあらしに、おもわぬ惨敗をす

る場合もあるうし、むしろ、その方が多いかもしれない。しかし、そのなかにあって、心くじけず、勇気を奮い起すゆとりというものをたえず、培っておく必要があるう。

賢慮ある者は、漸次に少量づつ、刹那々に、自己の垢穢をはらうべし。あたかも鍛工が銀の鉋垢を除くがごとく。

いちどに、私たちは、おのれの中にたった垢を払い落とすことはできない。たえず、心にかけて、少しづつでも拭い去るごとが賢明なやり方である。肉体についても、入浴するのに、いちどに長時間して、あと久しくしないよりは、適当な時間でも、ときどきする方が、体の塵も労少なく洗いさることができし、いつも清潔でいることができる。同様に、心の垢を払いおとす折も、しずかな、ひとときの反省のなかに、みずからをなげ出して、心くさらせぬように時おり洗濯することが必要であるう。

仏陀の語られる、いましめの言葉は、いつも具体的な譬えをもってなされる。現代という物質文明が優先する考え方がつよいときにおいては、精神の問題に、こまやかな注意をはらうことが少なく、仲々できにくい。このとき、もう一度、仏陀の言葉をかみしめることは、今日の生活のはげみとなりこよなき支柱となる。

◎宗祖法然上人七百五十年

御忌記念出版

望月信道老師再編

○定 価 金巻千三百円也
○郵送料 巻部金七十円也

浄土宗聖典(A9 版本文) (千四百七十六頁)

東京浄土宗刊行会出版

申込所 浄土宗教化団中央本部

東京都港区芝公園一九号地

振替口座東京六一九三九番

仏教音楽私考



村田 武雄

(音楽評論家)

仏教音楽はキリスト教音楽や回教音楽とともに世界の宗教音楽の大きな領分を占めている。キリスト教音楽が西欧音楽文化の根底をなす如く、仏教音楽は東洋音楽文化、とくにインド、トルキスタン、中国、東南アジア、日本に於ける音楽思潮の強い基底となっている。

西欧音楽はその源を東洋から引いているが、それが中世のキリスト教音楽以後しだいに東洋との交渉を絶って独立した音楽圏を作った。又それが西欧音楽の独自の様式や思潮を築く根源となったのであるが、一方東洋に対してはキリスト教に対する仏教の思潮を基とした東洋音楽を築く刺激となってくるのである東洋音楽のすべてが仏教音楽とはいえないが、

しかし西洋音楽がキリスト教に準拠する割合に比べれば、東洋民族の音楽は宗教的要素と深い関聯をもっている。それは単に仏教と具体的に結びつきをもって寺院音楽に於てばかりではなく、仏教の求心的音楽観が東洋民族の音楽にはなんらかの形で現れているからである。それだけに民族の生活のなかに深く食い入って、それが人間生活を慎み深く規律する倫理的な音楽観を植え付けたのである。

東洋諸民族の生活様式や感情は各民族によってかなり相異なるために音楽の在り方もまた異っている。キリスト教教会音楽、例えばローマ・カトリック教会のミサ聖祭の音楽の如く、キリスト教徒であるかぎりいずこの国でも又民族でも同

一形態によって儀式音楽が行われる統一は仏教音楽にはみられない。キリスト教音楽はむしろその音楽に西欧諸民族の古来からの音楽を吸収し又統一する力をもったが、インドに釈迦の死後仏教広布のため起った仏教音楽は中国、日本に入りにしたがって、その国の音楽のなかに同化してそれぞれ異った仏教音楽の形態をとるに至ったのである。かく各東洋民族文化の影響が仏教音楽には強く又濃く現れているところに、キリスト教音楽の発展とは異なる特色が発見されるのである。又その特色が仏教音楽をして東洋民族の生活と同化させる方向に変様せしめたのであった。

日本の仏教音楽の主流をなすものは仏教の經典にフシ付けて歌う「声明」である。声明はインド、中国を経て渡来して各宗が独自のフシ付を行うようになり、それが国語体の歌詞と結びついて「和讃」や「御詠歌」を生み、又盆踊唄などにも転化した。一方「舞楽」はインドや西域から入った仏教と関係をもったものが多く寺院の法会などに楽舞として行わ

れたが、神仏混合になってもっぱら神社の祭礼に移ってしまった。その他鎌倉時代の虚無僧の尺八や經典の解説を行った琵琶の類まで挙げるとインドや西域に起った仏教音楽はわが国に入って、日本の生活の中で一種の民族音楽化され、仏

教と日本人の生活との結びつきとなって変様し又消長したのである。その中で寺院での經文の朗誦を除くいく他の儀式音楽の多くは例えば「猿樂」や「田樂」にしてもかつては寺院に属していたのであるが今日では全く技芸の一部門となった。このようにインドに起源する仏教音楽には仏教を離れて普通人の音楽となつて、独自の芸術的發展をとっている音楽が少くないのである。それがひいて今日の仏教音楽の俗謡化した和讃や御詠歌の勢力となり、宗門によっては今もなお儀式音楽として雅楽を保存してそれを実行しているところもあるが、それはむしろ例外というべき状態を導いたのである。

しかし仏教広布のためもか又仏事を整えるための仏教音楽は往年の格調を伝えずとも、芸術的と娯樂的とを問わず有形無形に仏教思潮が音楽の中に入ってその中でかえって深く呼吸をしている場合がある。それは西欧音楽に於て、教会音楽や宗教音楽の類型外の音楽にもキリスト教的精神の顯揚が多々認められるのと同じく、現代の日本人のなかに流れる仏教思潮に通じる物の考え方が新しい作品を創らせる動機を与えることが認められるのである。黛敏郎の「涅槃」交響曲は今日の姿に於けるその考え方の現れととてよいであろう。黛がどこまで寂滅、寂靜の真意を実感して音楽化したか。そこには作曲技法上の嗜好やエグゾティシズムから発した東洋趣味の色が濃く感じられてアイデアの面白さの方が強く訴えるよう

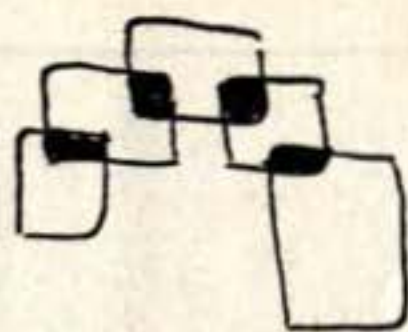
に私にはとれるのであるが、しかし東洋人でなければ把握し切れない精神的なタッチは実感できる。それも一切衆生悉くに仏性ありと説く思潮そのものでははないにしても民族性のなかに伝わる仏教的精神の告白とみることができましよう。

それは一作曲家の人生観や世界観だけの問題ではなく、日本がどこかにもってある血の叫びであり潜在する意識でもあると考へたい。

若し現在のわが国の仏教音楽のスケールをある段階で定着させているものがあるとしたら、その一つはその音楽の精神的鉦の浅いところにある。そしてその鉦脈を深める力は東洋の宗教的精神の把握にかかっていると私は考へる。現在又これからの仏教音楽は儀式音楽の実用的な枠から出て、仏教思想を根底とした芸術的音楽として新しい形姿を発見してゆくであろう。そこに伝統的な形態や様式の模倣から抜け出た、日本人及びその他の東洋人の民族的な知性と感性とに基いた仏教精神のみなざる新しい音楽の築かれることが期待されるのである。

現在又一方にキリスト教の讃美歌や聖歌を模して新しい仏教讃歌を作曲し、それを儀式に又教化宣教の目的で使用して

母三人の辯



三橋 美智也

(キングレコード歌手)

やがて雪が来そうな、つがる野面を吹く野分の中で私は岩木山に向って呼んで見た。

「お母さーん」

すると甘ずっぱい涙が頬を伝ってカサカサに乾いた唇を快く濡らしてくれた。心の底まで凍りつくような寒さと、佗びしさの旅巡りの中で、堪らなくなつて小舎を抜け出て母の名を呼んだ、遠い遠い少年の日の事を私は今でも忘れない。この日から私は、秋田の片田舎で、岩手への峠越えて、山形の山の中で母

の名を呼んでは僅に心を慰めていた。

不慮の事故で夫を亡くして、母は私達姉弟を育てるために随分と苦勞をしたらしい。大変唄の上手な人で、子守唄代りに民謡を唄ってくれたのをはっきりと覚えている。このまま埋れては勿体ないと、無理に請われては、事ある毎に引っぱり出され、舞台で唄っていたのを、袖の揚幕のかけにかくれてじっと聞き惚れていたのも一再ではない。やがて母は私達を連れて二度目の夫に嫁いだ。その頃か

ら民謡を厳しく仕込んでくれた。

三浦為七郎と言う民謡の神さまのように言われた人があって、この人が叔父に当る関係から私はここへ引き取られ、これを転期として正式に民謡修業が始まった。六才の春の初舞台を振り出しに思えば長い勉強と修練の連続だった。

叔父に連れられて、知らぬ他国の小さな小舎で唄い続けた幾春秋、だが頼みに思うこの叔父にも死なれてからは、肩あげのとれない年頃を、たった一人で故郷を遠く、母とも別れ別れの年月が過ぎていった。

赤ン坊くらいあるおむすびを六つ、風呂敷に包んで上京した私は、真っ先きに上野の西郷さんの前で、真ツ昼間のように明るい大東京の夜景に度胆を抜かれ、うす暗い林の中へかけ込んで、始めは口の中で、最後は思い切りの声を張り上げて

「お母さーん」

と叫んだ。

この日から私の東京生活が始まるのである。

る。あの事この事書けば限りがない労苦の連続だが、網島温泉のボーラーマンとして職を得た私の、どこが気に入ったのか来る度にソツと物蔭に呼んでは優しく激励してくれる、母と同年輩の婦人がいた。私はいつしか母の面影と婦人の映像をタブラせている自分に気がついてハッとしたものである。

この婦人が私の養母北沢の母である。

北沢家の養子になった私は、「お母さん」と呼ぶのが嬉しく、その当座は年甲斐もなく腰にまつわりついては「お母さんお母さん」の連発で、我乍ら苦笑したものだ。ここで明治大学に通う傍ら歌の道に専心したお蔭でキングレコードに認められてデビューしたのである。母を恋い、母の名を呼び乍らの苦難の半生にも明るい曙光が見えはじめた。

私には私を生んでくれた慈愛の母がいる。私には私を導いてくれる優しい母がいる。母二人の愛情の中で私は只管学業と歌の道に精進した。

幸いレコードがヒットして押しも押されもせぬ地位を築く事が出来、妻を迎えて家庭を持つようになったが、妻の母、つまり私の義

母がまた大変よく出来た人で、美智也美智也と可愛がってくれる。年に一回か二回、この母達が私の家で鉢合せをして「お母さん」と呼ぶ私の声に、母三人が一度にハイと声を揃えて返辞をし、大笑いする事も再々である。一昨年、世界一周飛び歩きを思いたち、ハワイを振り出しに、アメリカ、フランス、イタリー、インドと赤毛套ぶりを發揮して帰って来たが、ニューヨークで一番高いエムパイヤ・ステーツビルの天頂で、満ち足りた思いを胸一杯にふくらませ叫んだものだ。

(童)(心)(仏)(心)

うそつき

かあさん

「六時までには、きつと帰って来るんですよ。」

守君は、おかあさんに言われて遊びに出掛けましたが、十分遅刻して帰宅しました。

「あんたは、どうして、おかあさんの言う事をきかないの。約束を守らない子は嫌いよ。」

おかあさんは、がんがん怒りました。

「お母さーん」

幽かな笈をのこして蒼空の中へ消えて行く自分の声に耳を傾けて、かすかな郷愁を覚えたのも快い記憶の一齣である。

本年五月、また外遊の予定である。

スイスで暫く遊ぶつもりでいるので、あの辺の山かレマン湖畔あたりで叫んで見るつもりだ

「お母さーん」

と。

さて、次の日、おかあさんは、

「五時には帰って来ますよ。おみやげには、チョココートがいいわね。」

と言って、デパートへ買物に行きました。ところが、五時どころか、七時の御帰館。

「おそくなっちゃって、ごめんなさい。」

あわてていたので、チョコレートのおみやげありません。

守君は、ふくれました。おかあさんを信用しなくなりました。

「ちえっ。おとななんて、うそつきだなあ。自分で約束を守らない癖に、僕ばかり責めるなんて、そんなのあるかい。」



近代高僧伝

堀尾貫務

大橋俊雄

町人を中心とした文芸が爛熟の域に達し、類廃の気分さえみえはじめた化政期もおしつまる文政十一年正月七日、堀尾三右衛門の長男として名古屋城下に生れた貫務が、日夜に

金域を仰ぎ若人の心をたぎらせていた生活に別れを告げて、寿経寺の門を叩き法随の室に入って出家したのは天保七年二月のことであった。弘化元年には笈を負うて江戸にのぼり増上寺の学寮に入った。時に十七歳の春であり、在寮僅かに二年、同三年十二月には名古屋の養蓮寺を董じ、嘉永五年には師籍寿経寺に移り、慶応三年七月養林寺に転じたが、そ

の十二月には高岳院に移った。高岳院は藩主徳川義直が伽藍を造営してより以来、尾州候の香花院として権勢を誇った名刹であり、明治十六年五月には推されて大本山清浄華院の

法主となり、六十四世の法燈をついだ。時に彼は五十六歳という最も円熟し、覇気に満ちみちていた頃で、法席のあたたまる暇もなく各地に錫をとばし法雷を振っていた。所が翌十七年八月管長は一宗で一人しか置いてはならないという布令がだされた。当時の浄土宗は東西両部に分たれ、東部管長には増上寺法主がなり、西部管長には知恩院門主がなるな

らわしとなっていて、事実上二人の管長がおかれていた。これを一人にしなくてはならないというお達し。これが原因となり宗門は一時混乱の状態におち入り、宗務党と本山中心党が互にしのぎをけずり、又五大本山法主が交代で一年毎に管長をつとめるようにしたら等々幾つかの案が出されて収拾もつかぬ有様、ために法主は袂を分けて辞職し、時に貫務もその職を辞し、二条川東西寺町の正念寺に隠棲することになった。しかし其れも束の間和解成つて宗制なるや二十三年七月再び推されて、大本山百万遍知恩寺の法主となり、ついで三十五年六月には増上寺に転じた。

その間浄土宗専門学院長に就任したこともあったが、彼の生命は布教伝道にあつた。学徳ともに秀でた彼の諄々乎として説かれるみ教えは熱を帯び、聞く者をして耳をそばだて深い法悦にひたらせたのである。話題も豊富で、屈惑の思いにふけらせることはなかった。廿四年一月浄土宗布教会長となったのも、三十二年九月出でて朝鮮に渡り、韓国皇帝に謁し皇帝の御同情を

得て、彼の地に開教の基礎を立てられたのも、一に彼の布教力と徳のしからしめる所であつたが、中でも彼の在山中四十二年四月増上寺の大殿が祝融の災にあつたときの如き、焦心やるせなく、焼土の中に立った彼の姿は印象的で、見るも気の毒な有様であつた。明治六年炎上した増上寺が再建の工成り、入仏慶讃会を催したのは廿三年三月であつたら、それからまだ二十年の月日しか立っていないのに炎上の災にあうとは何と不幸なめぐりあわせであつたことか。江戸期徳川氏の外護をうけていた頃の増上寺ならともかく、御朱印を召上げられパトロンとのきづなをばったりときられた当時の増上寺は苦境のどん底にあつて、経済的にも不如意であつた。しかし何はともあれ仏法興隆のためにも再建しなければならぬという悲願をたて、八十六の老軀をひっさげ「我れ必らずや今生において再建し、命終せん」と深く意を決し、以来勸財のため休むひまさえなく、一途に再建の道をたどられ、北海道に巡錫なされた時の如き人力車にのつては体をいたため、草鞋をはいては杖にすがるなどして、一日汗水を流して歩

まれたこともあつた。しかも其の道のりたるや一日僅かに三里、如何に再建の業たるや茨の道の連続であつたかがうかがい知られるであらう。そして余生を増上寺再建のために捧げられた彼の姿は誠に尊く、集められた資財の全ては再建の資にふりむけられ、その甲斐あつて大正十年四月十二日上棟式を挙げる運びとなり、続いて十五日まで御忌を奉修されたが、その日までには炎上から十二年の歳月がまたたく間にすぎ去っていた。しかしこれとて十七年の月日をついやして完成までこぎつけたという明治初年の頃にくらべれば、まだ早やかつたと言えるであらうか。それというのも九十歳という高令、生前に是非とも成しとげたいという念願が一日でも早く完成させたいとはやる心に鞭うった結果の結実であつた。上棟式を終え御忌の奉修終つて安堵せられた貫務は、疲労も加わつたのであらうか、宿痼再発して臥床の身となり、時に弟子たちを集め、

この世をばこれが別れとなるとても

はすの台で物かたりせん

頼みおく吾なき後はむつまじく

念仏となへて世をくらせよとの二首を辞世として示し「自分は二十五日完祖法然上人の御正当の日に、阿弥陀如来さまの慈光のうちに逝かんと思つています」とねんごろに遺言し、日夜に念仏の相続をばげまれ、四月二十五日予言にたがうことなく道俗の人々端座低声助言念仏のうちに、身心快樂眠るが如く正念大往生の素懷をとげられた。時に年九十四、法名を綜蓮社大僧正安譽上人住阿一法貫務大和尚という。

思うに彼の一生は全く弘法と念仏勸化の明け暮れで、一人でも多くの人に法を伝えたいという念願が、遠く韓(朝鮮)に渡り、又北海道など全国各地に法雷を振う結果となつたが、それにしても九十余才の長寿を全うしたとはいへ、晩年まで殆んど休むひまなく再建のために力を注がれた心情は誠に涙ぐましいものがあつた。寂後墳墓は吉良頼康の城跡に建てられた、都塵をはなれた静寂の地九品仏浄真寺にしつらえられ、以来ここが歴代法主の奥津城と定められ、増上寺別院となつた。

大師御生活の管見

京都の檀那(二)

村上博了

一

大阪府(摂津国)勝尾寺は、箕面公園の一部となっている。自然公園で新緑によく紅葉に又よい、寺への中腹に大滝あり、附近に野猿が棲み、四季溪流のせせらぎは、人心を一洗する。山上近くの同寺本尊千手観世音や仏法守護三宝荒神の信仰と相俟って、古来の皇室の信仰もある霊地といわれている。

七百五十五年前の承元二年頃は、今よりより自然の姿であり、当時風流人士の憧れの探勝地でもあった。同年浄土門祖法然上人が四国讃岐國小松庄生福寺から紀州加太の浦や押辺を経て、同寺西谷に草庵を結び、移住せられてからは上人をしたい往訪の人々にも常に少くなかったのである、上

人は来訪者には浄土の法文を説き、お念仏をすすめて止まなかった。

二

ある日のことである。紅葉も秋日に映えて美しい中を、寺僧が見えた。「同山の恒例引声念仏会ですから、おいで下さいませ」という。案内されて御らんになったのである。引声念仏の音調は高く低く流れて、後丘の松樹にこだまし、いうにいわれぬ有難い雰囲気であった。

出僧十五名、如法の威儀ではあったが、その法服は破れ汚れて、さむざむとして見苦しさがあったのである。

同寺は元暦元年二月四日源頼朝の一部将梶原景時が放火炎上、一片の灰燼としてから、すでに二十四ヶ年を経ていた。諸堂も復旧していたけれども、恒例念仏者達の法服は見るかげもなかったのである。

法然上人は、西谷の草庵に帰えられてから、いつも上人の影のように添っている法

蓮房信空を改めて呼んだのである、御伝には、

弟子法蓮房をもて、京都の檀那におほせられて、装束十五具調して施入せらるゝと伝えられている。

この時法蓮房信空は六十二才であった、僧侶の六十二才は真価の溢れる時である。働き盛りの時代である。直ちに京都に使用したのであった。

三

勝尾寺は難波(大阪)天王寺村新別所(一心寺)から淀川を渡って島江・豊中を経て約二十K(五里)ほど奥に入った地点にあり、京都へは茨木を経て約十二K(三里)或は池田亀岡街道、竜王清坂峠を越えても行かれる便利な距離にある、上人草庵の西谷(現在二階堂、大阪一心寺中興真阿再興)は、同寺四世証如上人が念仏往生の善勝因地である。

かかる故地を選んで草庵を結ばれたことは、上人の深い考えに由っている。ここで詠まれた上人の御歌に、

柴の戸に あけくれかゝる 白雲を
いつむらさきの いろに見なさん

とあるは、西谷草庵の実景であらうし、念仏信仰一途に生き抜かれた七十六年の生涯を物語る。

信空は師命をうけると近道を選んで入洛した。

四

信空は久安二年、中納言顯時卿の孫、左大弁行隆朝臣の長男として生れた。保元二年十二才の時、比叡山黒谷叡空上人の許に入室したのである。丁度この年円光大師法然上人二十五才、共に一つ釜の飯を喰べた。

信空の父藤原行隆は、造東大寺大仏殿の長官ではあったが、その工事半ばの文治三年薨去している。大仏殿は建久六年三月十二日めでたく成就落慶法会を行った。承元二年はその十三ヶ年後のことである。法然上人の使信空入洛し、装束十五具調達の為め檀那を往訪した時には、法然上人を如来さまと仰いでいた禅僧藤原兼実公は、すでにその前年四月五日不食の病で薨去していた。

併し、法然上人の依らいをうけた京都の檀那は、直ちにそれに応じている。

武家政治が地について守護地頭の圧力の

強い時である。京都の檀那と雖も楽な生活とも思われない、例えばその檀那が武家であつたとしても突然のことである。速刻応じがたいものがあつたらう。

その時、直ちに上人の依らいに應じていることは、上人の人徳の果実である。又その檀那が誰であるにせよ、勅勘後のこと勅免ありとは申せ、かかることがすぐ実現したことは、上人に対する信頼帰依が絶対的なものであつた「仏の境地」としていられたからである。

寺僧よろこび、臨時に七日別時をつとめている。

五

上人は、この寺に一切経がないと云うことを聞かれて、上人所持の一切経論一蔵を、京都から取りよせて寄進している。仏教研究には一切経がなくては、経論の研究、伝道の花も果実もない訳である。古来の靈地も仏法守護の三宝荒神も「なにかせん」只形を残すばかりであることを憂いて、仏教興立の為に宗派を越えて、上人は所持する一切経を施入したのであつた。

一山七十余名の老若の僧徒は、大変感激して、御伝に、

はなをちらし、香をたき、幡をさゝげ、蓋をさして、むかへたてまつる。

と、仏菩薩を迎える同ようの行列で迎えたのである。その開題供ようには、京都から聖覚法印を招請したのであつた。聖覚の法話の中に、

農夫はすきをふむ、念仏をもて田うたとし、織女が糸をひく、念仏をもてたてぬきとす。鈴をならす駅路には念仏をとなへて鳥をとり、ふなばたをたたき海上には念仏を唱へて魚をつる云云 略

国のにきはい、仏のたのしみ、念仏をもてさきとす 略

一山の聴衆一同「法主なみだをながし、聴衆そでを、しばらくということなし」大變なよろこびであつた。信空も一役かつたろうことはいうまでもない。

上人の心の暖かさ、ひろさ、まさに仏の境地であり、その教化は絶大であつたのである。

迷執

(下)

牧尾良海

(大正大学教授)



楊舜俞の誇い掛けの詩を見終ると、その女は言った。

「貴方さまのお情けのほどは身にしみてよく分りますが、今日はどうぞ許して下さいませ。いつか又お情けにお対えできると思いますわ。今夜はどうぞこのままで、これ以上に妾を困らせないで頂きとうございます。妾も、もとは儒家の出身ですから、幾らかは読み書きを習ったことがございませ。今でも時折歌を詠じては氣持を慰めておりますの。折角お立ち寄り頂きまして

も、住居と来ては御覽の通り何の調度もないあばらやで、お酒はおろか、お口に適うお肴一つございませぬ。お客様に対して本当に御無礼なことではおはずかしうございます。でも、貴方さまは御立派なお方ですから、妾の無礼をお責めにはならぬと想います。妾も拙い詩を一つ作りまして、今のこの寂しい憂いを申し上げてみようと思ひます。どうぞ、お笑ひになりませんでね。」

その女は、これまでに迫って来た苦難の道を詩に読みこんで口吟するのであった。

往昔のこと、耳をも覆わるるべし
軍兵交々戦いし地は

骨と血と人に踐まれて塵となれり
兵革の声常にひびきて

高きも卑しきも誰か身を保たんや
姿やつして我国に帰らんとせしに

中道にして兇人に会えり

苦役を訴うるすべも無く

恥づかしめを見んよりは死を願え
り

幽魂は暁の月におどろき

・寒骨は新春におびゆ

狐兎のみ日頃の友となり

四隣は荆榛のみなり

君よく我が骨を移しなば

いつの日か相親しむことを得ん

舜俞は女の口吟を聞いていて、いたく哀れを覚え、並々ならぬその才能に一層心をひかれたのであった。

女は又、あらたまつて舜俞に言った。

「妾の骨は、人知れぬこの佗しいところに埋もれたまま、もう何十年経ちましたものやら、今では見当もつきませぬ。貴方がお帰り

の時に又此処へお立ち寄り下さって、如法に妾の骨を始末して下さいますならば、本当に有難いことで、その御恩はいつまでも忘れないつもりでございます。」

こうしてその夜は夜中対い合っていたが、女の方は凜然としていて、道ならぬことを言うすきも見せなかった。

夜明け近くなると、女は舜俞を門の所まで送り出して、あでやかに微笑みながら、

「それでは楊舜俞さま、くれぐれも妾のお願いをお忘れなきよう、お頼み申します。」

と言った。舜俞は、別れを告げて馬に乗り、ほんの数間ばかり歩ませてから後をふり向くと、もはやその女もあばらやも消え失せてしまつて、蕭条たる原野が朝の光の中に見えるだけだった。まるで一場の夢から醒めた様な気分であつた。彼はすぐに又馬から下りると、そのあたりの草を結び合わせ、土を掻き集めて小高く盛り上げて目じるしを作り、あたりの風景を胸にたたんで覚えこんでからそこを立ち去った。

彼はやがて蔡へ行き、友人に会つて所用

をすませると、帰路に又その皿じるしをしておいた野原に立ち寄つた。そこでその場所を掘ってみると、三尺ほど下の地中で果して一鉢の骨を発見した。彼は自分の衣料でその骨をすっかり包んで旅裏に収め、都へもつて帰つた。そうして山の手の高台の土地を買い求めて遺骨を埋葬した。かの女が哀れな死にかたをしたことを憐れんで、ちゃんとした棺に収め、衣装や小間物や、乗物などの形代もそえて鄭重に葬つてやつたのである。

それから三日たった夜の八時頃のことである。楊舜俞の部屋の扉を叩いて入つて来た一人の婦人があつた。起ち上つて近付き、よく見ると、例の越の娘である。

女は、舜俞に向つて再拝すると、お礼をのべた。

「妾の骨は久しい間塵あくたの中に埋もれていて、長いこと誰に訴えることもできませんでした。幸いにも貴方さまのお蔭で、こうした高台の一等地へ遷骨して頂き、やっと安住の場所ができました。本当に何と申し上げてよいのやら、お礼の言葉もないほどでございます。」

女の衣服は夜目にも鮮やかで、髪の毛も勾うばかりに美しく整つて居り、その艶麗さは始めて会つた時とは格段に勝つて見えた。舜俞は大層喜んで、早速酒肴や果物を取り寄せて祝盃を交した。この夜、女は舜俞の家に泊つたが、お互いに情意が融け合つて雲雨の欲をつくしたことは言うまでもないことである。

さて、夜明けが近付くと、女は舜俞に別れを告げ、

「明日の夜にまた参りますわ。」

と言って、消える様に見えなくなった。次の日の夜になつて、舜俞が酒や果物を支度して氣もそぞろに待ち設けていると、約束通りにやつて来た。

五六杯ばかり酒をやりとりしたあと、女は急に居ずまいを改めて言い出した。

「貴方から受けました大恩は、どんなにしてもお報いできぬほど深いものでございます。妾の方で大層御無理なことをお願いしたのですから、昨夜は一度だけ貴方とあはして道ならぬ仲を結んで身も心も捧げた次第でございます。妾は貴方のお蔭で漸く安住の場所

を得ましたので、何れ近いうちに往生することが叶うものと思います。お名残りは尽きませぬが、この上貴方とわりなき仲を続けてずると罪を重ねますと、又々往生安楽の時期が延びてしまいます。今夜こうして妾が参りましたのは、今日限り永久にお別れすることを申し上げるためだったのでございます。」

舜俞はびっくりして、慌ててさえぎった。

「貴女と私とは、それこそ膠と漆の様にぴったりと気持が合っていて、情愛は夫婦のその様にこまやかな筈です。どうして今更急に別れようなどと言うのですか。とんでもないことですよ。」

「妾が始めて貴方にお目にかかりました時には、見るもむざんな荒野に朽ち埋もれていまして、貴方のお誘いかけがありました。でも、敢てなさを結ぶことを避けましたのは、本当のところ、あの時貴方からお情けを頂いても、やがて妾の本性が判りになればかえってお憎しみになりはしないかと恐れたためでございました。今では、貴

方も妾のことを憎からずお思いになっただけで、下さる様ですし、妾も又貴方を心からお慕い申し上げているのですから、何時になったらこの間柄が尽きることでしょうか？」

妾は暗い暗い冥界の果てにいる身の上です。貴方は盛んな陽気の世界にいらっしゃるお方です。妾の方には何の障りもありませんが、このままでは貴方の御身を傷つけるばかりで、それでは御高恩に報いる道ではございません。どうぞ、もうこれ以上に妾を愛することをやめになって、今日限りで別れて下さいませ。」

女は切なさそうに頼んだが、舜俞はかえって憤りの色さえ浮べて言った。

「私がこんなにまで貴女のことをいとおしく思っているのに、どうして別れるなどということができる？、男女の情というものとはそんな単純な一時的なものではない筈だ。」

女は、舜俞が一向聞き入れそうもないのを見て、その夜は又舜俞の屋敷に泊った。

舜俞は別れようと言う女の約束をずるずると一日延ばしにするので、それからというものの、女は毎夜彼の所へ泊りにやって来た。

こうしていく月か過ぎると、舜俞は精根つかれはてて、やがて病床に臥す有様になった。越の女は昼になると隠れ去り、夜になると現われて介抱に当たった。

「貴方は、妾の申し上げることをおききわけなさらないから、こんな苦しみをお受けになるのです。」

女は看病しながらもとかく涙にくれていることが多くなった。

彼の病気がいくらか快方に向って来た或る夜のことである。女は何事か心に決めて言い出した。

「妾はもともと陰界の者ですから、勿論陰界の司の方から管轄されているのでございます。貴方とこの様なことをしているのが露見しますと、これから先、きっと地獄に落とされることでしょう。貴方は聞き分けなく妾をかえつてそんな目に合わせようとしていらっしゃるのですから、折角妾に徳を施して下さい。まして、何にもならぬことになりますわ。妾は二度ともうお側へ参らぬように決心致しました。貴方がそのためにお怒りになって、もう一度妾の骨を掘り起してばらばらにうつ

ちやりなさっても、致しかたもない因縁と
思つて諦めますわ。」

舜俞が止めようとするのをふり切つて、
女は去つて行つた。そしてその夜以後は、
ふつりとその姿を見せなくなった。

舜俞は、もしかしたらという期待で、夜
となく昼となく女の現われるのを待ち望ん
でいたが、いつまで待つても現われて来な
いので、或る日女の墓の下へやつて来て、
身をふるわさんばかりに泣き乍らかき口説
くのであつた。

「もう私は、他のことを何も望みはしな
いから、一寸だけでも姿を見せておくれ。
もう一度会うだけで諦めるよ。」

彼は紙銭や紙馬を供えて焼いたり、酒を
地上にそそいだりして、一心に祈つた。そ
の夜は女の墓の側に野宿して、或いは会え
るかも知れないと期待したが、それも空し
く白々と夜が明けてしまった。

彼はなおも墓園の中に三晩もとどまり、
妖魄に想いを寄せる詩を作つて、或いは訴
え、或いは祈りもしたが、更にその甲斐も
なかつた。

舜俞は、まるで正氣を失つたうつけもの
様で、寝食も摂れず、毎日ただ酒ばかりを少
しずつ飲んでいた。やがては肉もげっそり落
ちこけて、顔色もひどくやつれて来た。越の
女に対する彼の思慕は並々ならぬものであつ
たが、女はその後杳として現われ出なかつ
た。

舜俞は、恩を施してやったのにという自負
心が底にあるので、女の忘恩の仕打ちに我慢
がならず、遂々そのうちに、女の墓をぶち壊
して呉れようと決心して、狂執のあまり、早
速実行にとりかかつた。

丁度そのとき、一人の道士が通りがかつて
舜俞の異様なふるまいの訳を訊ねた。舜俞は
隠しきれぬので一部始終をうけあけた。道士
は彼をなだめすかして、墓を壊すことをまづ
やめさせた。

「おん身はその女の妖魄を恨んでおらるる
と見える。よろしい。拙道がおん身の為にこ
の女妖をこらして進ぜよう。」

通士は木を削つてお札を造り、その上に朱
で何やら咒文らしいものを書きつけた。その
お札は長さ四五尺もあり、墓に打ちこむと鏗

然と音が聞えた。道士は又空中に向つて長く
文句を唱えたが、声は清亮で遠くまでひび
き、聞く者は五体がひきしまる様に覺えた。
道士は、舜俞に青い紗の布を頭から被せて、
墓に正対するように言いつけた。暫らく経つ
と、俄かに例の越の女が五本の組み合わせた
木に縛られて現われ、獄卒数人がこれを囲ん
でびしびしと鞭でなぐりつけているのが見え
た。女は身をよじり悶えて苦しみ、大声をは
り上げて泣き叫ぶのであつた。道士はやがて
獄卒を呼んで、しばし鞭打つ手をやめさせ
た。

女は、まなじりを血に染め、舜俞をはつた
とにらみつけて罵つた。

「遠き古えより、冤死の骨を葬り代え、そ
の靈を遷した義士は多しと聞いていたのに、
お前の様に靈鬼の色香に迷つてこれを惑乱
し、かえつてわざわいを受けさせたという例
しは聞いたことがない。今、お前は僅かばか
りの情を施して、かえつて己の淫欲を遂げん
と謀り、罪を重ねることを懼れてお前から離
れようと心を使えば報復にわが墓をこぼたん
と企て、今又道士を頼み繩目を与えてむち打

たしめ、吾を責めさいなん。皮膚は破れ、血汐は足につたわって朱に流るる姿がお前の眼には哀れとは映らぬのか。お前のかくも賤劣な本性を、早くに見ぬくことができたら、たとえ吾がこの骨が汚泥の下に踏みくだかれていようとも、この地に移されることを願いはしなかったものを、かりそめに欺かれて、今この憂き目に会うこと、無念とも不覚とも、言う甲斐もない口惜しさよ。」

女は、無念さに湛えかねて、はらはらと涙を流していた。

舜俞は、その様子を一見するなり慌てて道士を再拜し、己れが過まっていたことを告げて、鞭打つことを直ちにやめるように頼んだ。

悶え苦しんでいた女の姿がふっと消え、と、道士は静かに言った。

「幽界と現世とは本来その道を異にしており、人間と鬼とでは生きる道がそれぞれ違うのじゃ。人と鬼と相会えば双方の為によろしくないことで、特に現世にある御身の方を損うものじゃ。そもそも人の生命

というものは、始め陽氣が陰氣に立ち勝っており、壮年の頃には陰陽二氣が互角にならび、老年になると陽氣が少なく、陰氣が多くなる。陽氣が尽きて陰氣だけ残っている時、それは死の時じゃ。おん身は今壮年であり、氣血最も昌んであるべき時に、自ら進んで純然たる陰氣の異物を追い回して、折角の陽氣を消耗していなさるのじゃ。陽氣が尽きて死神からお使いが来るのも、もう間もなくでありましょうぞ。一体、儒者などと氣負っている人々は、物事の道理に適應しようとせず、矢鱈に小むづかしい典籍をひねくり回して読むばかりで、誠に笑止千万というものじゃ」

「全くもって私の誤りでございました。あの越の女は、私が此処へ遷骨して葬ってやりましたものでございますが、今、重いのがめを受けております。何卒救してやって下さい。」

道士は笑いながら言った。

「貴方が、なおも恨めしく思う心がおありなら、もそっと痛みつけてもよろしゅうござるが——」

舜俞は、慌てて再び救いを乞うたので、

「それでは、貴方の為に救してやりましょう。もともと、あの女が造り出した罪ではないのじゃ。」

道士はこう言いながら、己が手で墓の上のお札をぬき取り、お札を言おうと引きとめる舜俞の方を見向きもせず立ち去った。

その後、舜俞は迷執も醒め、折にふれてはかの越の女のことを懐かしく想い浮べていたが、或る夜、夢の中にその女が現われて、しみじみとお札を言う声を聞いたのである。

「貴方は、危うく妾をおとしめようとなさいましたが、飄然と又思い返して頂き、情をかけて救って下さいまして、本当にお礼の申し様もございません。たとえ幽冥境を殊にしておりまして、遠くよりお慕い申している妾の心に変りはございません。どうぞくれぐれもお大切にお願いしますように。」

(青瑣高議別集卷之三)

×

×

×

×

浄土の会員を一人でも多く

◆どなたでも会員になれます。

◆会費は年額六〇〇円です。

◆会員には毎月浄土を配布します。

◆この会は皆様の会ですからその発展の為に

お一人でも多くの会員をつくって、正しい

信仰運動をひろめましょう。

お知合の方にぜひおすすめて下さい。

◆お申込は振替（東京八二一八七番）を御利

用下さい。

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

今年も「浄土」で明るい生活を

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

（送料 四円）

会費一カ年

金六〇〇円

（送料不要）

浄土

三月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十六年二月廿五日 印刷

昭和三十六年三月一日 発行

定価 五十円

編集人 村瀬 秀雄

発行人 佐藤 密雄

印刷人 神谷 秀雄

印刷所 神谷印刷株式会社

東京都品川区上大崎一ノ七八二

発行所 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

法然上人七五〇年大遠忌記念

須賀隆賢著

法然上人

一口絵二枚 本文十数枚写真入

B 6 一九二頁
価 二〇〇円
三十冊以上一五〇円

中学生にもわかるやさしい紀行風の御伝記。本書は特に記念のため実質に近い販売価格になつておりますので御了承の上施本用にお申込み下さい。部数により割引いたします。

中村 元 増谷文雄
ジョセフ・M 北川 編集

現代仏教名著全集

全十巻

第一回 第八巻 好評発売中

日本の仏教 (3)

圭室諦成
中村 元
『日本仏教史概説』
『近世日本における批判
的精神の一考察』

第二回 第三巻 三月上旬配本

印度の仏教 (2)

宇井伯寿
木村泰賢
『印度哲学研究』の諸篇
『小乗仏教思想論』

隆文館

東京都千代田区神田佐久間町二の一
振替 東京 一五三一〇二番
電話 (八六六) 一一〇一―五番

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
昭和三十六年二月二十五日印刷 昭和三十六年三月一日発行

日本一の生産・設備

梵鐘 (54cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (21cm~51cm)

音響物理学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展参事香取正彦先生
芸術院賞受賞



日本最初の黄綬褒賞
(昭和三十年四月廿七日)
鑄物師 老子次右衛門翁

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分(梅田新道大映横東へ一丁右側)

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪(34) 8847番 本社工場 高岡市横田

浄土

第二十七巻

第三号

定価金五拾円(送料)